

全学共通カリキュラム運営センター主催  
大学教育開発・支援センター共催  
シンポジウム筆録

## 「自校教育」の意義とその可能性を探る

日時：2005年12月5日（月）17時30分～20時30分  
場所：池袋キャンパス 8号館8202教室

- 〈基調講演〉 折田 悦郎 氏  
(九州大学 大学文書館教授)
- 〈事例報告〉 小関 素明 氏  
(立命館大学 文学部教授)
- 山内 乾史 氏  
(神戸大学 大学教育推進機構、大学院国際協力研究科助教授)
- 渡辺 隆喜 氏  
(明治大学 史料センター所長、文学部教授)
- 老川 慶喜 氏  
(立教大学 学院史資料センター長、経済学部教授)
- 〈指定討論者〉 西山 伸 氏  
(京都大学 大学文書館助教授)
- 千葉 望 氏  
(ノンフィクションライター)
- 〈司 会〉 寺崎 昌男 氏  
(立教大学 大学教育開発・支援センター顧問)

### I 開会挨拶

○山本 定刻の5時になりましたので、始めさせていただきます。

本日はお忙しいなかをたくさんの方に本シンポジウムにご参加いただきまして、まことにありがとうございます。全学共通カリキュラム運営センター部長の山本です。本シンポジウムの始めにあたりまして、ひと言ご挨拶をさせ

ていただきます。

本シンポジウムは、本年度、特色GPに申請した立教科目が採択された記念として開催される最初のシンポジウムです。立教科目は、立教大学の建学の精神である、キリスト教の精神に基づく人格の陶冶を現代的な課題に即して、「都市」「大学」「人権」「宗教」の4つのテーマおのおのに複数の科目展開をして、そのなかで学生の主体的な

学びを促し、立教大学生としての誇りを持ってほしいという目標を持った科目展開をしています。この立教科目が特色GPに採択されたことを機に、その4つのテーマのうちの「大学」、そのなかの、自分の大学の歴史から学ぶ、すなわち自校教育という企画でのシンポジウムの開催の運びとなりました。

本日は、今回の我々の企画そのものが、たぶんわが国のシンポジウムの企画としては初めての試みだろうということで、いろいろな方々にぜひ参加をお願いしたいということでお呼びかけをして、しかもこういう流れですでに教育のなかで自校史教育を展開されておられる方々にお声がけをして、ぜひ本日のシンポジウムでお話し願えないかとお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。ここであらためてお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。

本日は、立教大学からの報告も交えて、本シンポジウムが自校教育のこれからの可能性等を探るということで、参加されているみなさま、そして主催しました我々ともども、ぜひ実りあるものにしていきたいと考えていますので、ご協力よろしく願いいたします。

本日は、この企画の最初から主体的にかかわっておられる寺崎先生に司会をお願いすることで進めていきたいと考えております。

では、本日はどうぞよろしく願いします。以上です。

○寺崎 みなさん、こんばんは。今、ご紹介いただきました寺崎であります。今日のシンポジウムの司会をさせていただきます。

お配りしている『『自校教育』の意義とその可能性を探る』というペーパーの右側にだいたいの予定が書いてありますので、ご覧ください。最初に、基調講演をお願いすることになっていきます。次いで、本学を加えて4人の先生方に、まことに無理を申し上げて、まず20分でお話をいただくということになっています。そのあと、休憩を挟んで討論ということになります。そのほかに、指定討論者として、西山先生、千葉先生のお二人にお願いしていますので、そのご発言を機会に、その次の討論にいきたいと思います。

逐次申し上げますが、今ちょっとお願いしておきたいのは、ご所属とお名前のカードと、ほかに質問事項のカードが配られます。それで、できれば質問事項をお出しいただきたい。それに基づいて討論のほうを組み立ててみたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。だんだん会場が混んでくると思いますので、もし新しい方がおみえになったら、ちょっと席を譲ってあげてください。よろしく願いいたします。

では最初に、九州大学の大学<sup>かんしよ</sup>文書館教授でいらっしゃる折田先生にお願い

いたします。折田先生は、今、大学文書館の教授でいらっしゃいますけれども、九州大学は最近、長い前身があったのち、大学文書館という名前のアーカイブスを立ち上げられて、先生はこの唯一の専任教授でいらっしゃいます。

では折田先生、よろしく願います。

### Ⅲ 基調講演

○折田 九州大学大学文書館の折田でございます。

本日は、先進的な取り組みをされておられます立教大学のこのような場にお呼びいただきまして、まことにありがとうございます。いわゆる情報公開の時代に入りまして、国立大学は法人化をいたしました。九大もキャンパス移転や、創立百周年をひかえまして、アーカイブへの理解が高まりました。今、寺崎先生からお話いただきましたように、本年度から従来の大学史料室を改組して大学文書館ができました。本日は、大きな、かつ理論的なお話が求められているのだと思いますが、もともと歴史が専門でして、どうしても実例に寄りかかりながらでないと、お話ができません。何よりも私の力量不足で、やはり九大の事例、いわゆる自校史、あるいは自校教育ですけれども、今日はそこに焦点を当ててご報告をさせていただきますと思います。

ところで今、私は自校史と申しましたが、これは他の方も言われておられますが、ちょっと気になる言葉であります。わが国独特の言い回しなのでしょうか。たとえば英語で言うとうどうなるのかなど、あとでご教示願えればと思います。

それでは、最初に資料の説明をいたします。1頁目に沿革図のあるもの、これが本日主に使用する資料です。それから、封筒の中に入った資料があります。この中には私の書いた論文や新聞記事をまとめたもの、パンフレット等が入っています。また今からお話ししますが、回覧資料の報告書や教科書、DVDがあります。適宜、ご参照いただけたらと思います。

それでは始めますけれども、資料1に挙げている西山論文によりますと、現在多くの大学でいわゆる自校史教育が行われています。九大では1997年の後期から—これは国立大学では最初だと思いますが—、始めました。開始にあたり参考にしましたのは、明治大学、関西学院大学、早稲田大学、立教大学等の事例でした。明治では、九大より一学期早く、1997年の前期から、関西学院ではさらに早く1995年から、そして立教では寺崎先生方が、また早稲田では佐藤能丸先生が、早くから行われていました。いずれも自校史を中心としながらも、自らの大学を近代史のなかに位置づけようとするもので、幅広い視野のもとになされているところに

特徴があります。

私どもが始めましたのは、今言いましたように1997年でしたけれども、ちょうどこのころに自校史教育の一つの画期があったように思われます。名古屋大学が自校史教育を始められたのが1998年。そこには当然、年史編集の成果があるわけですが、九大の事情は少し異なっていました。まずはこのことからご説明いたします。

第一に、九大では教員の間、いわゆる教養部の解体に象徴されます、教養教育のあり方に対する一つの共通認識がありました。これは、学生の学力不足、あるいはアイデンティティの不足、自尊感情の欠如、それから、これはどこでもそうだと思いますが、受験生は偏差値で判断をして、受験、入学してまいります。これらを問題視し、それへの一つの対応として、自校史教育が考えられたわけです。教員のなかには、九大史を必須にすべきだと言う人もあったぐらいです。つまり九大では、たとえば近代史のなかで九大はどのように位置づくのかというような問題関心よりも、九大自体の歴史、その教育に関心があったということです。

ただ、ここで強調しておきたいのですが、それは単なる愛校心を植えつけようとするものではありませんでした。九大で学ぶ学生が、どうすれば「知」の主演であるという意識を持ちうるのか。そのためには、自分のいる大学のことを知ることから始めるべきだろう、

ということで開始したものでした。

しかしこれは、私は何度か報告等させていただきましたが、なかなか理解されにくいことです。いろいろなことを言っても、結局は愛校心を叩き込むのではないかという、いわば疑念ともいいましょうか、そのようなものが報告を終えたあとで、よく出てきました。

この愛校心をめぐる問題につきましては、これは仮定の話ですが、少なくとも私自身について言いますと、もし私の学生時代にこのようなものがあつたとしても、受けなかつただろうと思います。私よりももう少し上の年代ですと、よくタテカン（立て看）に「帝大解体」と書いてありましたが、おそらくは「粉碎」のターゲットになったような授業かもしれません。

今言いました愛校心の問題につきましては、それが自然に出てくるのであれば否定はしませんが、これはあとで述べますけれども、「九大の歴史」の授業をやりまして、それに対するある受講生の感想、「やはり自分の通う学校のことぐらいは知っていたほうがいいに決まっている」というものなのですが、私にはこれが、今でも一番びたりとくる「解答」であります。

次に九大の事情の二つ目ですが、九大の場合、自校史教育を始めるにあつては、大学史料室（現大学文書館）があつたということが、やはり重要でした。これは九大では自校史教育を最初

から大学アーカイブとの関係で考えられたということを意味します。『年史』は、『七十五年史』ができたばかりでしたけれども、それを利用して何かをやるとか、あるいは『年史』の後始末論的に自校史教育を始めたわけではないということです。

なお、私の大学アーカイブ論につきましては、資料2に簡単にまとめております。また、お手元の封筒に拙論(3本)が入っていますので、あとでご参照ください。

それから、九大の話の三つ目ですけれども、自校史の開講・進め方は、九州大学の歴史そのものに大きく規定されました。九大は発足・その後の歴史からしまして、アイデンティティを非常に共有しにくい大学でした。資料3に図がありますが、九大の前史は明治初期にまでさかのぼります。直接には1903年の京都帝国大学福岡医科大学なのですが、九大としては1911年から始まります。創立に関して、一種のずれが生じているわけでした、創立記念は常に先発の医学部が8年早くやり、全学のものでは遅れて開催される。それから、キャンパスも離れています。ただし九大は、大学としては最初から帝大として始まりました。建学の理念というわけではありませんが、いわゆる帝国大学令の「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」という有名な第1条、少なくともこれに規定された大学として

始まったということです。

ということは、いわゆる大学昇格運動は必要なかったわけでした、その意味では恵まれていました。しかし、卒業生をも巻き込む全学的運動(昇格運動)がなかったということは、のちの九大の校風、アイデンティティのあり方に大きな影響を与えました。また、新制大学になるとときには旧制高校(福岡高等学校)を引き継ぎますけれども、その伝統はほとんど受け継がれませんでした。そして、これらの反映・結果としまして、現在、キャンパスが七つに分かれています。全部足しますと非常に広大で、合計244ヘクタールもあります。これは演習林などは含んでいません(演習林を含めると、さらに桁が2桁上がります)。これが、あとで言います新キャンパスに移転しますと、全部で300数十ヘクタールになる。ついでに、九大の現在の学生の数等も述べておきますと、学生1万8,000人、うち留学生が1,100人、専任の教職員4,500人、そして大学院が16あるという、大きな大学です。しかし歴史的には、今言いましたように、キャンパスが分かれていますアイデンティティを共有しにくい大学であるということです。

そこで、こういうふうであれば、九大人としてはアイデンティティの持ちようがないのではないか。歴史をきちんとふり返り、あらためてそこから発想することが必要であろう。こういう考え方、私たちが自校史教育を始

めるにあたっては、根本にありました。

四つ目に、ではどのような方法で自校史教育を行ったかということですが、これは大学独自のプログラム経費を3年間、1,800万円ほどもらいまして、共同研究で行いました。まず最初に、私が「九大の歴史」をやりました。本来は少人数ゼミ形式でしたけれども、受講生の数が多く、講義形式に変えて行いました。内容は、資料4のとおりです。最初に高等教育制度を持ってきましたのは、たとえば旧制高校の制度を知りませんと、教養部問題も理解できないからです。受講生が興味を持ちましたのは、自分の学部の歴史。それから、九大は帝大ですけれども、実はその学部のほとんどが地域の寄付でできている、そういった事実。あとは学徒出陣や大学「紛争」などです。

毎回、感想文を書いてもらったのですが（その概略は資料5に入れてまとめています）、この感想のなかに、「九大史だけではない、よりグローバルな大学史、大学論をやってほしい」という声がありましたのには、よい意味で驚きました。そこで1999年からは、「大学とは何か—ともに考える—」を総合科目として始めることにしたわけです。なお、九大の全学教育につきましては、資料6に入れてありますので、ご参照ください。

この「大学とは何か」の担当と内容ですが、これは資料7のとおりです。大学史料室の専任・兼任教員が中心と

なりました。前半に歴史的分野、後半に各論を置きました。たとえば2回目の吉岡教授は、原子力問題などで有名な方ですけれども、この講義などは特に優れた大学史、大学論だと思います。そのほか、入試、あるいはキャンパスについての講義も人気のある分野です。

講義の仕方につきましては、アンケートの例を資料8に挙げています。このアンケートは、当時の九大大学教育センターの専門家の協力を得てつくったもので、アンケート全体につきましては、今日の見学資料『試行授業「大学とは何か—ともに考える—」の記録』の中に入っています。あと、授業でのその他の工夫ですが、科学史の中山茂先生をお呼びしたり、総長、副学長、名誉教授に講義をお願いしたりしました。それから、寺崎先生にもお越しいただき、シンポジウムを行い、受講生にも参加してもらいました。

今言いましたのは、最初のころの試みですけれども、現在でもやっていますキャンパス見学や、旧制高校のイメージがなかなかわかりにくいということで、山田洋次監督の映画『ダウンタウンヒーローズ』の鑑賞（これは最後に、主人公が新制九州大学の法学部を受験するという映画ですけれども）、これはなかなか好評です。この感想文は、見学資料の『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』の中に入っており、非常に面白いものです。

このように、授業に関しましてはいくつかの工夫をしましたが、なかでも重要だったのは、教科書をつくったことでした。目次を資料9に挙げていますが、教科書を出したことの意味は、少なくとも九大のなかでは大きなことでした。元総長からは総長賞をもらい、現総長も九大独自の教育活動の例として、記者発表などで紹介したりしています。

ここで二つの授業についていくつかのデータを示しておきますと、資料10のようになります。受講生は一年生が多い。それから近年は、同時間帯に多くのゼミが開講されるということで、「九大の歴史」のほうは人数が減ってきている。また、総合科目のほうも希望者が600人ぐらいあったのですが、それでは教室に入りませんので、半分に絞り、さらに近年では開講前にレポートを課すということで、資料10のような人数になりました。

以上、このような試みにつきましては、寺崎先生、それから京都大学の西山先生、広島大学の羽田先生などから外部評価をしていただき、寺崎先生にはご著書の中にも入れていただきました。マスコミからもわりと注目されまして、他大学からの視察もありました。

そういうことで、今度は自校史教育の、いわば効用とでもいった点について考えてみたいと思います。自校史教育には、自分の居場所（大学）のことを知りたい、それは結局はアイデンティ

ティの確認だと思いますが、そういう学生の要求に応え、その結果、彼らは自らを他者に対して説明できるようになる。あるいは、学生の保護者に対するよい宣伝にもなるといったような効果が言われています。資料11は受講生への効果ですが、九大大学文書館の副館長、新谷恭明教授がまとめたものを挙げました。このような効果があるのではないかということです。

また資料12ですが、受講生に2年後に追跡アンケート調査を行いました。これはさほど回収できなかったのですが、そこに書いてあるとおりの内容が返ってきました。このようなアンケート結果や、総長の講義、シンポジウムなどの感想文を見ますと、やはり何らかの波及効果はあったものと考えられます。

ただ、この受講生に対する効果といえますのは、実際には時間がかかり、卒業後何年もしてから出てくるものかもしれないという気がいたします。それより、わかりやすいと言いますか、おまけみたいなものですが、学内での大学史料室に対する理解の深まりが出てきたことは、私の立場からするとありがたいことでした。それから、講義の準備、あるいは教科書編集の過程で、大学史料室の研究活動の質が当然上がります。また、自校史教育の必要性に対する教員の認識も高まりました。

副学長で、現大学文書館長の有川節夫理事は、大学アーカイブでの自校史

教育の実践について、「自らの大学の歴史を通じて学問の大系を知ることにつながる」、また「アーカイブによる事務文書の収集、保存は、文書を保存し続けてきた事務職員の職務意識の向上にもつながる」と言います。このように考えますと、大学アーカイブによる自校史教育活動は、学生教育だけではなく、いわゆるFDにもつながっていく可能性があるのではないかと思います。

ところで、今FDと言いましたが、少し関連しまして、マスコミの自校史教育をめぐる報道の姿勢についてもふれておきますと、お手元の封筒の中の新聞資料10ページ、読売新聞の「学生よやる気を抱け」というものですが、これなどに象徴的なように、マスコミはどれも「今の学生はだめだ」ということにしたがるようです。たとえば典型的なのは、「分数のできない大学生」というものですが、それに対して教員、大学は何やかにや努力しているということにしたいらしい。しかし、こういった批評は一面的すぎるのではないか。研究中心でやってきた教員のほうにも問題なしとは言えないだろう。私感ですけれども、一言しました。

今までは、共同研究やごく初期の話が主でした。そこで今度は、九大の現状についても少しご説明しておきたいと思いますが、実は、近年いくつかの問題が出てきました。一番の問題は、教科書を刊行してから、講義中に私語

や、いわゆる内職が目につくようになったということです。原因はいくつかあるでしょうが、一つは、受験勉強同様に教科書を覚えようとする、あるいは、覚えればすむといった態度でしょうか。そこで、現在では「九大の歴史」と「大学とは何か」の二本立てをやめて、資料13のように一本にしました。「大学とは何か—九州大学を通じて考える—」という授業に統合しております。それは、「九大の歴史」のほうで受講生が減ってきたこと、他のゼミが同時間帯に増えたということですね。それから、総合科目のほうは定年になれる先生方が出てきて、従来の組み立てが難しくなったことなどによるものです。こうした結果、私の持ちコマが5コマ、それから、新たに大学評価情報室の先生が、現在の九大の分析などをする時間が2コマ。九大関係が増えたこと、それからメインの担当者を置いたことで、私語などへの注意も行き届くようになりました。従来は多くの先生方のリレー講義でしたので、出欠の確認などに不備があったのですが、このようなことはなくなりました。

しかし、全体的な面白みは以前のほうがあったような気がしますし、「九大の歴史」のほうも、たとえばキャンパスが七つありますから、それを一つずつやるとしたら、その時間はやはり必要です。また、いずれにしろ教科書の改訂・再編は必ずやらなくてはなりません。これらは、ここ1、2年の課



題だと思っています。

それから、現状の二つ目ですけれども、資料14のような、新キャンパス計画推進室の先生を代表にして、本年度から「大学とは何か」と同じ時間帯に、総合科目の「新キャンパスを科学する」が開講されました。私も1コマ担当しています。私は以前から、資料15ですが、新キャンパスでの複合的な教育ということをご提案しておりました。歴史学だけではなく、考古学や生物学等の分野も入れるようにしたらよいのではないかと思っていたのですが、「新キャンパスを科学する」というのは、この私案と同じようなものだと思います。

ところで、九大の新キャンパスに関する授業は、実はこれだけではありません。資料16、これは生物学を中心とした矢原徹一教授のゼミの例ですが、こういうものもあります。履修条件として、調査活動、ボランティア活動もやらなければならない。さらに資料17、これは矢原ゼミ等から生まれたもので、NPO九大環境創造舎、代表はこの資料を書かれた佐藤剛史先生ですが、こういったような活動も出てきています。これらは、自校史教育（歴史の教育）ではありませんが、一つの自校教育の例であり、また、大学と地域との連携の例でもあります。こういったものが他の大学でもあるのかどうか判りませんが、九大でなぜ行われているのかといいますと、それは現在の九大の最も大きな課題が、キャンパス移転

とその建設であるからにはほかなりません。

そこで、キャンパス移転のことを少し述べておきますと、本年10月から実際の移転が始まりました。まず工学部の半分、2,300人ほどが移転しました。残りの工学部2,000人は来年移り、以後15年間で1万数千人が移ります。ただ、建物は工学部の分しかできておりません。こういった状況ですので、新キャンパスに関連した授業等には、当然大学中枢部の考え方が反映されます。先ほど言いました新キャンパス担当の有川理事・副学長は、「新キャンパスは環境マインドを持った学生、人を育てる場所である」。あるいは、「新キャンパスの創造に立ち会って、それに参加するということは、学生の教育に大いに役立つ」ということを言われておりますが、先ほどの矢原先生のゼミやNPO九大環境創造舎などは、その実例です。

それから、九大の現状の三つ目ですが、今のことと関連しまして、本年夏から行われました一連の新キャンパス移転関係イベントと、大学文書館の活動があります。これは九大の歴史の展示や講演会などですが、こういった活動を行いました。最後の資料です。

この資料は9月以降の行事のうち、その一部を抜き書きしたもので、線を引いたところが大学文書館が関係したものです。福岡市中心部での九大史の紹介、DVD（九州大学の歩み一創設

から伊都キャンパス誕生まで一)の作成とその上映。それから本部地区、新キャンパスでの展示会、講演会などがあります。これを見ますと、一連の行事のなかに「九大の歴史」・大学文書館が組み込まれているのが解ります。

これらの活動に対しましては、「アーカイブとしての自立性はどうか」とか、あるいは今言った活動が、「自校史教育、自校教育活動にあたるのか」といった批判が当然予想されますが、前者につきましては、文書館の自校史に関する活動が学内で認められた結果であると思っております。そもそも一連の行事に参加したのは、当方からの申し出ではなくて一もちろん申し出てもいいのですが、本部からの要請でした。また二つ目にしましても、これは市民の方への広報という意味が大きいです。展示、講演会などは自校史教育活動の成果の「活用」であり一たとえば講演会の組み立てなどは、受講生の疑問や質問をもとに行いました。このほうが数段、わかりやすくなります一、また展示会には、九大生の見学もけっこうありました。それから、展示・後援会等の活動は広義の社会教育活動でもあります。

新聞資料の後ろから2枚目、これを見ていただくと、今言いました講演会のこと載っています。そこで講師は、先ほど言いました「新キャンパスを科学する」の先生方でもありまして、

この講師陣とともに私も「九大の歴史」の講演を行いました。

以上、九大の現状を述べました。次に、これまでふれ得なかった問題を二、三述べてみたいと思います。一つは、外国大学の事です。ただし、これはまったくの門外漢ですので、国際資料研究所の小川千代子さんや、創価大学の坂本辰朗先生にご教授いただいたことを参考に述べますが、たとえばアメリカなどでは、いわゆる自校史教育はやっていないようです。アーカイブも資料提供に特化した活動を行っている。アーキビスト養成の「教育」にかかわる可能性はあるようですが、どうも自校史教育はなされていない。これは、大学の教職員が、一つは教育、二つは研究、それからもう一つが管理運営部門と、三つの部門にはっきりと分かれていることと関連するのかもしれない。ドイツのイエナ大学の文書館長が九大の文書館に来られ、うかがったのもほぼ似たような話でした。

一方日本は、少なくとも国立大学の場合は、大学文書館の専任に教員を充てているということとも関連すると思っております。大略、今まで述べてきたとおりであります。私たちが自校史教育を始めるにあたっては、日本での先例は参考にしましたけれども、外国大学のことはまったく勘案しませんでした。日本の大学の実情から、いわば自然に始まったというのが実際です。

ところで、お手元の新聞資料の一番

最初のページ、「大学って何一九大が学部超え開講一」とあるものですが、ここに某予備校のコメントが載っています。「大学に入ってからでは遅いのでは」というものです。これは「自校史」ということに限定しても、論理的に矛盾したものですけれども、これなどはそもそも予備校が入試に出ない大学史、大学論、特に個別大学史などをやるはずがありません。これは高校でも同じでありまして、オープンキャンパスのときに私どもの教科書を販売しましたが、引率の先生も含めて1冊も売れませんでした。教科書の中身の問題はひとまずおくとしても、九大グッズの団扇や「いも丸」というお菓子のほうが、よほど売れました。こういった事情や、何よりも受験生、進学生は偏差値で入ってくるということを考えますと、自校史教育をやるのであれば、やはり私は大学自身の手で、大学自身の責任でやるべきだと考えます。

次に二つ目、自校史教育を担当する組織ですけれども、お手元の拙論にも書いておりますように、私はやはり大学アーカイブが最も適当だろうと思います。たとえば、『年史』編集室が行うこともありうるわけですが、編集室は目的が違うだろう。ただし、『年史』が一番いい教材であるということは論を俟たないところでありまして、逆に教育活動から見えてくる課題を『年史』の中に取り入れるということも可能です。九大はもうすぐ創立百周年を迎え、

大学文書館も『百年史』編集に何らかのかたちで関係することになると思いますが、自校史教育の経験から、『年史』に入れなければならない項目がたくさんあります。特に大学生活、学生生活の実態などは、まだ判っていないところも多い。寺崎先生が東大について書かれている『プロムナード東京大学史』ですけれども、これにある項目などを九大に即して、きちんと書く必要があります。

三つ目の問題としましては、現在の自校史教育は、開講に力点を置いた時代から、よりよい教育のあり方を考える時代が変わってきたと言えるようです。そうしますと当然、教育目標の設定や授業内容・方法の検討、学生による評価・点検の導入など、自校史教育を大学教育のなかにきちんと位置づける努力が必要になってくる。そういう意味で、現在、ほかの大学の先生方にもご協力をいただきまして、「科研」を申請していますが、認められましたならば、またあらためてご報告させていただきますと思います。

時間もあまりありませんので、あとは簡単に申し上げますが、九大は自校史教育をとりあえずは初年次教育（低年次教育）と位置づけてきました。しかし、大学院大学ということになりますと、高年次、あるいは院生向けの授業についても考える必要がある。それから、アーキビスト養成と自校史教育、大学アーカイブとの関係等々、いくつ

か考えられますが、これらは今後の課題といたしたいと思います。

最初に申し上げましたように、九大はその歴史から、キャンパスが分立してアイデンティティを持ちにくい大学でした。これが自校史教育を始めた一因ですけれども、この事情は現在でも同様です。たとえば、九大は一昨年、まったく別の大学であった九州芸術工科大学と統合しました。そして法人化直後にはキャンパス移転という大きな事業が始まりました。これはもう大変なお金がかかります。その意味で、九大は今非常に厳しい状況にあり、総長ならずとも皆強い危機感を持っています。本報告の後半部でキャンパス移転のことについてお話いたしましたのは、私たちが自校史教育を始めたのと同様の意識、つまり自らの歴史を踏まえて現状を認識し、将来を見据えようとする意識が、新キャンパスの移転を機に、九大の中に強く出てきたのではないかと感じたからであります。

以上、九大を例としながら、自校(史)教育の意義とその可能性について述べてまいりました。本来は基調報告として、教育の理念、組織、内容、方法、課題、展望、可能性などを、諸大学の例に目配りしながらお話しすべきでしたが、このようなものになってしまいました。ここで、九大に関しまして簡単にまとめておきますと、現状への認識から自校史教育を始めたこと、大学史料室(大学文書館)が中

心になったこと、それから、教科書をつくったこと、最近では、新キャンパスをめぐる歴史以外の自校教育の展開が見られるということ、になろうかと思えます。

なお今、大学史料室(大学文書館<sup>ぶんしよ</sup>)が中心になったと申しましたが、私はやはり大学の中にアーカイブがきちんと位置づけられていることが、最も重要だと考えています。基本であります文書資料の収集はもちろんのこと(本年、九大では事務文書が段ボールで700箱も入ってまいりました)、新旧キャンパスを記録するというプロジェクトや九大関係者のオーラル・ヒストリーなどには、大学からの特別経費が認められました。福岡市からも、移転予定の本部地区の歴史的建物の調査委託が大学文書館あてになされています。また私自身、大学のいくつかの委員会の一員になっていますが、その一つに九大ブランド戦略チームというのがあります。どうやって大学のブランドを高めるかを考えるチームで、これなどに象徴的かもしれませんが、大学戦略のなかに大学文書館が位置づけられている。これが強く出ているというのが、法人化後の九大の特徴かもしれません。今の話が自校史教育とどう関連するのか、十分な検討が必要ですが、いずれにしろ、そのような文書館活動の一例として、九大の自校史教育、自校教育があるということが実情であります。

以上のお話は、移転をひかえた国立

大学法人九州大学の非常に特殊な例であり、建学の理念が明確な私立大学との違いも想起されるでしょうか。ただ、キャンパス、これには大学近辺も含んでいいと思いますが、それをめぐる教育や、戦後、専門学校、師範学校等の、いわば「寄せ集め」で始まったとされる新制国立大学等にとっては、あるいは少しは参考になる話だったかもしれません。基調報告というより、問題提起ということでご寛恕願えればと思います。

最後に私事になりますが、立教大学と言いますと、私が尊敬しておりました中野実さん、それから今の上司である新谷恭明教授、そして押しかけ弟子を自称しているのですけれども、寺崎先生に非常にゆかりのある大学です。最初に申しあげましたように、このような時間をいただきましたことに、あらためてお礼を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

○寺崎 どうもありがとうございました。始まる前に、折田先生の基調講演がどのぐらい時間が延びるかで、終わりの時間が決まりますからね、などと大変失礼なことを申しあげましたけれども、びったりに終わっていただきまして、まことにありがとうございました。

今、お話しになりましたように、立教大学文学部卒業生の新谷教授も、今ご一緒に九州大学の自校史教育に熱心に参与していらっしゃいます。それと

もう一つ、今回っております資料の中で、学生たちの意見を集めたものは本当に傑作です。あとでご覧になると非常に面白いと存じます。いくつもの珍回答が寄せられていまして、今の学生たちが学校や大学のことをいかによく知らないか。「旧制高校というと、私は旧姓佐藤とか、旧姓田中とかいう、あの旧姓だと思っていました。しかし、制度が違ったんですね、びっくりしました」というような感想がちゃんときています。そういう点では、九大の試みは大変効用の大きい教育であったと思われまます。

それでは、ここで10分ほど休憩にし、ちょうど6時に再開したいと思います。

#### IV 総長挨拶

○山本 それでは、第2部になります。が、事例報告に入ります前に、立教大学、本学総長の押見輝男から、みなさまにご挨拶をさせていただきます。

○押見 立教大学総長の押見輝男と申します。本日は諸大学から各先生方がいらして下さって、立教大学において本シンポジウムを開催できたことを大変ありがたく、かつ光栄に思います。本日のシンポジウムにご参加くださった方にも、心から感謝申し上げます。

目下、わが国の大学は個性化、いわゆる個性的な教育研究の遂行が求められています。各大学、特に私立大学はそれぞれ独自のミッションを持って誕

生してきたわけですし、今はその誕生の原点を再確認することが求められているのではないかと考えています。

それからまた、学生においては、大学への帰属意識を高めるということが大切であるとされていますが、これは大学への同化ということだけではなく、学生一人ひとりのアイデンティティ、特に社会的アイデンティティを確立する上で極めて重要であるからだと認識しています。

さらにまた、大学が持っている集団の雰囲気や集団の風土というものが、そのメンバーに大変大きな影響を及ぼすということはよく知られていますけれども、各大学の集団の雰囲気や集団の風土がどのように形成されてきたのか。そういう分析は十分ではなかったのではないかと考えています。

今、こういう課題において求められているのは、各大学における心理・歴史的な分析でありまして、自校教育というのは、まさにそういうものに基づく教育的実践であると私は理解しています。

折田先生の基調講演を大変楽しみにしていたのですが、本日、大学内の会議が長引きまして、最後の部分しか聞けなくて残念でしたけれども、このあとは私もフロアのメンバーとしてお話を聞かせていただきたいと楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。ありがとうございました。

○山本 どうもありがとうございます。

では、再び自校教育シンポジウムに戻ります。寺崎先生、よろしくお願いたします。

## V 第2部 事例報告

○寺崎 それぞれ20分ずつという大変過酷な注文をお出しして恐縮ですが、小関素明先生からよろしくお願いたします。

先生は、立命館大学の教授でいらっしゃるしまして、ご専攻は日本近代史とかがっています。今日は1時限休憩講して駆けつけてくださいました。

### 事例報告1－立命館大学

○小関 どうもありがとうございます。ただいまご紹介にあずかりました立命館大学の小関です。よろしくお願いたします。

先ほど折田先生が40分という時間内にきちんと終わられましたので、大変なプレッシャーがかかっていますが、できるだけ簡潔にお話しさせていただきますと思います。今日はお招きにあずかりましてどうもありがとうございます。ただちに本題に入りますけれども、立命館の場合、大学史の教育に関しては比較的后発でありまして、始められたのが2002年です。九州大学、明治大学、立教大学、京都大学、いろいろな大学の事例を参考にさせていただきながら始めました。

どういう理念で始めたかということ

なのですけれども、みなさんのお手元に私の話のもとになるレジュメと資料、合わせて6枚のものをお配りしていると思います。それとあと、5部ばかり回覧のための25枚綴りの、講義用のレジュメをお配りしています。これはみなさんすべての数は用意していませんので、「回覧」と書いたものでご覧いただければと思います。

どういう理念で始めたかと申しますと、これは私が書いたというか、書かされたものを資料1に載せています。全部読む時間はありませんが、開講の理念、もしくは目的として、先ほどの折田先生の話とかなり共通するのですけれども、要するに、20世紀後半の歴史の激動、あるいは21世紀に向けた歴史の再検証、さらには自己のアイデンティの再確認ということを中心にしました。せっかく始めるので、私としてはできるだけ気宇壮大に書こうと思って書いたつもりなのですけれども、一部にはちょっとオーバーなのではないか、ソ連の崩壊といったことと大学史がどう関係あるのか、という意見もありました。ただ、私としては偽りなく書いたつもりです。ちょっとお読みいただければと思います。

それともう一つは、これはやはり大学の歴史を通じて日本近代史を学ぶということですね。さらに、立命館などの場合は、私立大学とはという問いがそこに付加されてきます。大学とはどういうものか、私立大学とはそのなか

でどうあるべきなのかという問題です。

もう一つは、立命館は1900年に大学ができましたので、今、百年史の編纂事業を進めていまして、百年史編纂室という恒久の機関もできて、ようやく第1巻を1999年に出しました。第2巻は、もう本当は出ていないとだめなのですが、諸般の事情で遅れていまして、間もなく出る予定で、第3巻は今、ようやく準備が進んでいるところです。その過程で、いろいろな資料とその他の人的スタッフを蓄積しましたので、その成果を学生にも還元しようということです。1、2巻は私も少し執筆しました。

では、講義の特徴ということはどういう点にあるのかということなのですけれども、これも特に珍しいことを試みているというわけではないと思いますが、一応、お話をさせていただきたいと思います。

まず、授業運営形態上の特徴ですけれども、これはリレー式講義をとっています。半期完結型です。立命館はご存じとおり、キャンパスがいくつかに分かれていますので、前期は衣笠キャンパス、後期は琵琶湖キャンパスでやっています。みなさんにお配りした資料2というところに、その半期のスケジュールを載せています。だいたいそのメンバーは百年史にかかわったメンバーであると同時に、私はまだ若いのですけれども、あとのメンバーはだいたい副学長経験者、もしくは学部長経験者で、

年齢で言うと名誉教授クラスか、定年間近ぐらいの高齢のベテランの先生方をお願いしています。

最後の話は、初年度から2年間は大南正瑛という前総長の講演。ここ2年ばかりは現職の長田豊臣総長。それから、このモンテ・カセムさんというのは、立命館が大分で建学しましたA P U (Ritsumeikan Asia Pacific University) という大学の学長をやっておられます。これはいろいろ案がありまして、最終回の講義ですから、自由に、学生だけではなくて誰でも入れるような講演会にしたいということでいろいろ準備をして、せっかくだから有名人を呼ぼうなど、いろいろな案が出ました。立命館出身の有名人は誰であるか。ヤクルトの古田選手などを呼んで最後は盛り上げようとか、いろいろ考えたのですけれども、ベナントレース中に来てもらえるわけもなく、結局、比較的学内に近い方に落ち着きました。そして、自由参加型にしています。

初回に、どういう講義なのかという概略を紹介しています。あるいは、留意点を説明しています(資料3)。その他に、本講義の課題ということで、講義の特色を述べまして、講義内容の概略として、時期区分をして、できるだけ話がわかりやすくなるように、学生に提示しています。大きく言えば4つの区分ですね。1番「草創期の立命館」、2番「戦争と立命館」、3番「戦

後の民主教育と立命館の変容・発展」、4番「新たな大学像を求めて」、1980年代から現代までですね。このなかでさらに細かく、どういうところを聞く必要があるかということピックアップしまして、簡単な説明をしています。

そして、最後に、問題点というかたちで、特にこういうところを注意して聞いておくようにと注意を喚起しています。特に、1970年代以降、とりわけ日本の私立大学、立命館ももちろんですけれども、それが大転換を遂げたといわれている時代から今日までの大学政策についての評価は今後の課題であるという点に注意をうながしています。

やはり学園を単純に美化するようなことになってはいけません。あるいは、学園のナショナリズムを単純に鼓舞しないように、ちょっと批判的に聞いておいてくださいということを、ここで私は申しています。どういうことを言っているかということ、経営的には、一応、今の立命館というのは成功したように見えますし、大学も表向きはそのようなことを謳っています。それは必ずしも間違いではないのですけれども、まだ多くの課題が残されているということです。教育機関として、あるいは研究機関として成功したかどうかということは、まだ検討すべき課題があるし、まだ完全に総括しきれてはいません。だから、そこはぜひみなさんの頭で考えてくださいというかたちで、学生への問題を私が投げかけています。



いろいろなエピソードや事例も組み込んで、たとえば「学祖西園寺」ということを今、謳っていますが、西園寺を学祖と言いだしたのは1980年以降で、それまで学内では、「学祖西園寺」ということはあまり言っていませんでしたということを学生に言ったり、あるいは、立命館は来年から小学校をつくるのですけれども、学費が150万円。給食を大津プリンスホテルから運ぶということを計画していて、きみたち、これでいいかということ、ちょっと学生に言いますと、学生はそういう話は非常に興味深く聞きますし、若干批判的に聞いてほしいということで、私もちょっと図に乗っていろいろなことを言って、初回の授業をビデオに撮られていて、あとでちょっと後悔しましたけれども、そういうこともやっています。

もう一つは、学生との意思の疎通ということで、これはこの授業だけというわけではないのですが、コミュニケーションペーパーというものを回しまして、これは毎回ではないですけれども、各担当者ごとの最終講義の時間に、このペーパーを回しています。これが資料4です。基幹授業は全部これをやると決まっており、一応、大学が用意したフォーマットがあるのですけれども、各授業のフォーマットは担当者が自由に考えていいということですので、これは私がいぶ変えて学生に配っています。簡単に見てみますと、授業はわ

かりやすかったか、わかりにくかったかとまず聞いて、わかりにくかったと答えた人は、それは自分の責任か、担当教員の責任かと聞くわけです。これは緊張感があるほうがいいと思ひまして、要するに、学生にとっても自分よりも教員が悪いと言うのは勇気もいりますし、聞くほうの教師にとっても、おまえの説明が悪いと言われると、これは緊張感をもって読まないといけませんので、こういう緊張感を持たせようという意味で、ちょっと質問の項目をややきつめに変えています。こういうかたちで学生と意思疎通を、なっているかどうかわかりませんが、しています。それでどんな意見があったかは、あとでまた少し述べます。

開講方針上の特色ですが、これはちょっと変遷があります。最初は特殊講義ということで位置づけられていたのですが、やがて2003年度以降は、全学教養科目というもののなかに再編されました。全学教養科目の理念というのはどういうものなのかということ、教養教育とは何かという大問題にかかわってくるので、そのこと自身を問い始めると深刻な議論をしなければいけないのですが、一応、2006年度に向けた教養科目の開講方針の最終案がこの間出ましたので、それを資料5にお付けしています。これをご覧になっていただければ、おおよその雰囲気は察知していただけるのではないかと思います。

今、立命館で開いている、もしくは

開こうとしている教養科目というのは、資料6の一覧表に添えています。その中の「世界の史的構成」というものの9に、「日本の近現代と立命館」というのが位置づけられています。これは2003年度からやりました。

ただ、ここはちょっと動揺がありまして、当初、一回生向けの科目としてやっていたのですけれども、初年度開講してみますと、存外、三回生以上の学生が多かったのです。それ以降、では二回生以上の配当に変えようということで、二回生以上の配当科目に変えたのですけれども、そうしますと、今度は人数が減り始めて、これではいけないということになりまして、来年度からまた一回生配当科目に戻すという方針が一応決まっています。ただ、これにはちょっと批判もありまして、受講生が減ったからといってころころ配当回生を変えるというのは節操がないという批判もあったのですけれども、受講生が少なくなるというのはまずいということで、そのように変えています。

授業の現状としてどういう問題点があるかといいますと、これはやはり残念ながら受講生数が漸減しつつあるということです。2003年度は360人いたのですが、2004年度は少し増えたものの、2005年度は227人に減っています。これはほかの授業と重なったり、時間割の関係ということもあるのですけれども、やはりそれだけではないような

気がします。ですから、こういう問題もちょっと一時議論的になって、配当回生を変えた理由になっているわけですね。

成績はどうかということですが、ここまでお出しするべきかちょっと迷ったのですけれども、2005年度前期で、定期試験の受験者数が219名。成績の分布がAプラスというのは、立命館が2年ほど前からつくっている範疇で、90点以上です。Aが80点以上、Bが70点以上、Cが60点以上で、Fが不合格ということなのですけれども、約3分の1が不合格ですから、これはちょっと不合格の学生の割合が多いと言っていいかと思います。

受講生の声はどういうものがあるかという、これは概して好評と言っていいかと思いますが、ただサンプル数があまり多くありません。みなさんのところにお配りしている資料7というのは、大学が全授業をマークシート式で学生にアンケートをとり、それをコンピュータ集計したものですけれども、回答者数が44人しかいません。実際に授業に出ている学生はもう少しいるのですけれども、回収できた枚数が44枚ですので、あまり多くないのですが、これを見てもみますと、たとえば質問項目の10や12を見ていただきますと、ある程度積極的、少し消極的という層が多いですね。授業の難易度は、ちょうどいい、やや難しいというのが多い。あるいは15番の、この授業に関する自

習というのはあまりしていないという人が多いですね。知的好奇心が刺激されるということでは、ある程度刺激される、あまり刺激されないというのが多い。満足度を見ましても、ある程度満足、少し不満、このへんがほとんどであるわけです。ですから、相対的にはそれほど評判は悪くないと思います。感想なのですが、いろいろありまして、全部書ききるわけにいきませんので、以下、ピックアップしたものです。やはり学園紛争に関する感想が非常に多くて、興味深かったとか、非常にエネルギーを感じたとか、あるいは大学に愛着がわいたとか、いろいろあるのですけれども、同志社に対するコンプレックスがとれたというのまであったりするのですが、批判的なものはあまりありません。どちらかというと肯定的な感想が多いと思います。これはお読みいただければと思います。

今後の課題なのですけれども、これはいくつかありまして、一つは、やはりどうしても授業がマンネリ化します。というのは、大学史の場合、授業の性格上、毎年内容を変えるというのは非常に難しいですね。何とか概説とか、原論というのだったら、少し力点の置き方を変えるなどして内容を変えられるのですが、大学史は重要な部分がない決まっていますので、内容や趣向を変えるということが非常に困難です。どうしても若干マンネリ化しがちな傾向があります。

第二に、先ほど先生がおっしゃられたように、学園ナショナリズムですね。これは、大学の側がある程度戦略的に醸成しようというねらいがあるのかもしれないけれども、事実、内容を聞いていますと、学園紛争のところで、ほかの大学は全部、大学解体という方向への破壊的なパワーの爆発として開始したけれども、立命館の場合は大学解体のエネルギーをうまく大学再建に結びつけることに成功し、それが今日の立命館の躍進になっているというかたちで授業をされますと、どうしてもやや学園ナショナリズムに流れそうな感じがしています。やはりその点には留意しておいた方がいいということはあると思います。

第三に、評価の方法の難しさです。重要論点が一応しているために、定期試験の論述式の問題もだいたい同じようなかたちになって、しかも各担当者ごとに選択式にします。どうしても変化の乏しいものになりがちであるということもあります。

第四に、授業担当者ですが、やはり担当可能な学内の先生が非常に限られてきます。誰でもというわけにいきません。非常勤の先生に簡単にお願ひするということもできませんので、担当者も固定化されます。ですから、その担当者は、授業がなくならない限り、ずっとその授業に張り付くようなことになりかねないという側面があります。

配当回生の問題は今申しましたので、

省かせていただきます。

第五に、受講生にどこまで、どういう質の情報を開示するかという問題があります。建学の理念という表の部分だけを述べてしまいますと、これは非常にきれいごとのような話になってしまう。下手をすると大学紹介のパンフレットに毛の生えたような話になりがちです。逆にキリスト教系の大学のような崇高な理念というよりも、経営戦略的な話が非常に多い立命館のような大学で、「裏面史」をすべて率直に開示するわけにもいきません。ただ、平和と民主主義に邁進したという建前だけに終始しますと、そんなきれいな話ではないでしょうということになって、これはそこの振り分けが難しいかなと私は感じています。

最後に、高度成長期以降、立命館大学、特に私立大学が大きく変わった時期以降の歴史というのは、なかなか歴史としてまだ総括できていないという側面もあります。大学運営の課題とねらいというのはわりに示しやすいのですが、いわゆる具体的にやったことの正否ということに関して言いますと、歴史として総括しにくいために、どうしても大学の事業報告のようなかたちになりがちなのですね。どういう機関をつくったとか、どうもそういうことに偏重しがちで、受講生にとっては、聞いているとやや退屈かなと思います。見ていると、若干そういう雰囲気教室に漂うかなという感じがします。

もう少しいろいろあるかもしれませんが、私が見ていて感じた課題というのは、やはりこういうところかなと思います。今日のシンポジウムにふさわしい話だったか、自信はありませんけれども、今、私が見させていただいている授業の現状としては、こういうことなのではないかと思うところをお話しさせていただきました。ありがとうございました。

○寺崎 本当に率直なお話で、まことにありがとうございました。あとで、お話しになれなかったことなどを補っていただく機会を設けたいと思います。

それでは次は、山内乾史先生です。

山内先生は、神戸大学の、現在は大学教育推進機構というところの助教授であって、国際協力研究科の助教授も兼ねていらっしゃいますが、この大学教育推進機構自体は、ついこの前まで神戸大学大学教育研究センターと言われていました。所属先の名前がちょっと変わりましたけれども、どうぞよろしく願いいたします。

## 事例報告2－神戸大学

○山内 ただいまご紹介いただきました、神戸大学の山内です。

今日は、私はこの立教大学にお招きいただいたことを非常に感銘深く、それもこういう自校教育についてお話しするようにということでお招きいただいたことを、非常に感銘深く思ってい

ます。と申しますのは、今、寺崎先生からご紹介いただきましたように、私は教育社会学という分野です。以前、広島でシンポジウムがありましたときに、かつてこの立教大学の総長を務められました教育社会学御専攻の浜田陽太郎先生のお話をうかがいました。そのときに浜田先生が会場の人々に向かってこのようにおっしゃったわけです。「ここに国立大学の教員がたくさんいる。あなた方が教えている国立大学の学生たちは、あなた方の大学の校歌を歌えるのか。国立大学に校歌があるということすら、知らないのではないですか。先生たちも歌えますか、歌えないでしょう。立教大学ではそうはいかない。4年間で歌えるようにしなければいけない。」本当に立教の学生が歌えるのかどうか、私も知らないですけども、いつもの調子で自信満々でおっしゃっていました。それまで自分の学校について知るとか、自分の学校に愛着を持つとかということについて、あまり授業と結びつけて考えたことがなかったのですけれども、浜田先生のお話をうかがったのが、ちょうど私が神戸大学に着任した前後でした。助手から講師になりまして、授業を持つようになる前後でした。どういう授業をしようかと常々考えていました。私は寺崎先生が関係されている大学史研究会のメンバーでもありますので、大学史も少し交えて、そのなかで自分の勤めている神戸大学についても、学生に教える

ということを考えてわけです。

何度かやっていますいろいろわかってきました。理学部の学生や工学部の学生は文系のことを知らない、文系の学生は理系のことを知らないというのはよく言われることですが、たとえば理学部の学生であれば、物理学科の学生は、数学や生物の学生は何をやっているか、そういう学科の先生が何をやっているかさえ知らない。工学部でも、農学部でも同じです。自分の学部、学科、狭くいけばゼミまでいますけれども、そこ以外のことをあまり知らないということがよくわかったわけです。

3、4年前に、現在の野上智行学長が就任されまして、そのときに、こう言われました。教養教育の評判が非常に悪い。そこで、どのような手だてが考えられるかを考えろとのご指示がありました。魅力ある教養教育の科目名をあげろという宿題が、私どもセンターの教員に課せられました。私は自分の経験から、神戸大学の歴史や、あるいは神戸学といった授業をやったらいいのではないですかと言いましたら、では、そういう授業をやるからあなたが世話役をやれというお話がまいました。平成15年度後期から、毎学期ずっと開講されているわけです。もっとも授業のコーディネイト役といたしましても、純粋な事務の裏方ですが。今日お手元に用意しました資料は、その平成15年度後期の授業に私が全部出て、チェックして、最後に、学生にレポートを提

出させるわけですが、それをすべて読んで、採点して、それをもとにどういう授業が行われて、どういう感想があったのかをまとめて、学長と学部長に提出したレポートです。ですから、ここには非常にきれいなことしか書いてありません。今日はその裏話をたくさんしようと思ってまいったのですが、ビデオに収録されておりますし、あとで活字起こしをするということですので、いささかカモフラージュしてお話しさせていただきます。

実は、私どものところで大学史に関する授業は2つあります。一つは、レジュメの1ページ目の一番上に書いてあります、「神戸大学史」。これは、百年史編纂室の先生方がコーディネートしておられます。これは教育史、あるいは経済学史、経営学史といった各学部の歴史専門の先生方が集まって、神戸大学史をいろいろな角度から話されるものです。折田先生や小関先生がお話しになったような自校教育というのは、これに近いものかと思います。間違っていたらお許してください。もう一つありまして、「神戸大学の歴史・現状・将来」。これが、私がコーディネートさせていただいている、学長と部局長のリレーで行われる形式の授業です。

なぜこのように2つあるかと言いますと、いろいろ恥ずかしい事情がありまして、折田先生や小関先生のような高邁なお話ではありません。要は、教養教育の担当ということに関しまして、

臨時増定員に伴う教員ポストの増加分を返上するとか、あるいは第10次の国家公務員削減とかの影響を受けて、教養教育を担当している先生がどんどん減っているわけです。当然、他部局に応援を求めるわけですが、そちらも減っているわけで、なかなか快く応援して下さるはずがないわけです。部局長会議や評議会ではいつも揉めるわけです。学長がとうとう業を煮やしまして、そんなに文句を言うのだったら、いっぺん教養教育を担当してみたらどれくらい大変か、支援が必要かわかるだろうということ、表向きの理由はともかくとしてリレーでやることになったわけです。部局長や学長になりますと、自分の学部のゼミは持ちますが、それ以外は授業を担当しません。とくに、教養教育などはまったく持たないというのが、私どもの大学では通例でした。

もちろん、それだけがこの授業の目的ではありませんが、それも一つの隠れた目的だったわけです。

先ほど折田先生のほうからお話がありましたように、国立大学というのはどうも大学の統合性とか、統一性がゆるいところがあります。旧帝大などはまだよろしいほうでして、旧制の官立大学は相当ゆるくなっています。私は神戸大学に移る前に広島大学に勤めていましたが、いずれも非常に統合性が弱く、どちらも統一された同窓会組織すらありません。学部間の壁が非常に厚いわけです。そういった事情の

ため、自分の学部に対する愛着は持っているけれども、大学全体について知らないし、何の愛着もないという教員、学生が非常に多いわけです。

私どもの調査でわかったのは、大学に入って1年たって、自分は入る学部を間違えたという学生が約3分の1いるということです。こういう学生は、クラブやサークルに入っていれば、大学には愛着を持って、大学生活に希望を持って在学し続けていくわけです。しかし、クラブやサークルに属していない学生は、学部で失望した時点で、どうするのか。転学部、転学科を希望して、かなわない場合はよその大学に移る、あるいは一旦退学して神戸大学内の他学部を再受験するということになりかねないわけです。

そこで、大学全体に対する理解を深める一必ずしも愛校心の養成ということではありませんで、もうちょっと大学全体を理解するという意味ですが、一ことが必要ではないかと考えるわけです。この大学にいたら自分に何ができそうか、大学はどういう機会を提供してくれそうか、他学部の教員はどのような研究をしているのか、他学部の学生はどのようなことを考えているのか、そういうことを理解する導入教育の一種として、自校教育を始めてみようというねらいが表向きはあったわけです。

そこで、学長、部局長といった大学の執行部である先生方に、大学が今、何を考えて、何を行って、どこへ向か

おうとしているのかということ、それぞれの立場からお話しいただくということになりました。

学長は当然、ポーロニャ大学、パリ大学といった古いところから、大学史のこと全般をお話しになり、各部局長はそれぞれ自分の部局の歴史についてお話をされると。そのスタイルはてんでばらばらです。べつに統一的な内容で話されているわけではありません。しかし、それが学生にとっては非常によろしいようです。要するに、各学部の個性やスタイルが非常に表れているということです。たとえば第4回目の船寄俊雄先生という方は、教育史の専門家として、戦前戦後の日本の教育史について、非常にお詳しい。その専門家の立場から、旧制高校、旧制大学の話を非常に深く展開されるわけです。ところが、瀧澤栄治先生という方は、法学の先生でいらっしゃるが、資料もお配りにならずに、パワーポイントもなし、板書もされずに、とつとつと自分がどういう研究をしているかをお話しになる。また、工学部の森島俊行先生は、最新のロボットについてパワーポイントで学生に見せる。こんなことをやっている先生がいるのかということ、文系の学生は初めて知るわけです。自分に見えている神戸大学は、自分の専門分野一あるいはそれに近い先生方、あるいは学生一、クラブでふれ合うよその学部の学生は別として、自分の専門分野に近い、あるいは取っ

ているゼミに出ている学生などごく一部の領域しか見えていない。非常に口幅ったい言い方ではありますが、こういう授業を通じて、神戸大学のなかにいる教員、学生の多様性、資源としての豊かさを少しでも感じとってもらおうということが、こういう授業を展開している一つのねらいであります。大げさに言いますと、他者理解を通じた自己理解ということです。

たとえば今の学生は、一先ほど寺崎先生もおっしゃっていましたが、一どういうことを知らないか。神戸大学は旧制の神戸商業大学であるということを知らない学生はさすがにありません。けれども、「三商戦」というのがあります。現在の一橋大学と大阪市立大学と、3つの旧制の商科大学、商業大学で、ずっと交流戦をやっています。旧七帝大が「七帝戦」というのをやっているのと同じであります。三商戦という名前は聞いたことがあるけれども、一体何だと。三商大とは一体何だと。そういう学生は神戸大学にもたくさんいるわけです。そういうことについて話すと、初めてわかったという学生がたくさんいます。

それから、たとえば農学部のお話になることで、最近、神戸牛ではなくて神戸大学生というのが、三越で売っているわけですが、そういった神戸大学生や神戸大学ブランドの酒などを農学部でつくっている。これはたぶん予算獲得の一つの手段であるので

しょうけれども、一所懸命やっているわけです。そういうことを話しますと、全然知らなかったと、非常に大きな驚きの声が寄せられます。神戸大学の教員ですと、だいたいそういうことはニュースで見たり、あるいはいろいろな機会に知るわけですが、学生のほうには全然伝わっていないわけです。

あるいは、法学部や経済学部を中心に北京キャンパスというのをつくって、北京に事業展開をしている。そういうことも、教員でしたらある程度は知っていますし、少なくとも法、経済、経営といった学部の先生方はご存じであるわけですが、学生には全然伝わっていないわけです。

ですから、先ほど小関先生からお話がありましたように、大学の情報公開や、悪く言えば宣伝ということにつながるのかもしれませんが、大学が今、どこへ向かおうとしているのか、何をやっているのかということ、学生は全然、表面的にしか知らない。それを部局長、学長がちゃんとプレゼンする。それに対して、学生のほうから最後にいろいろなレスポンスをレポートで返してもらうわけです。このレポートを紹介して、私の話を終わらせていただきたいと思います。

レジュメの2ページ目に挙げましたレポートが非常に典型的な例です。これは経済学部二年生の男子です。「僕がこの講義を選択した理由の一つは、神戸大学は旧帝大とも肩を並べるほど



多くの学生・学部を抱えながら、その中にいる自分は神戸大学のことや他の学部、学生を知る機会が非常に少なく、一方で、多種多様な人材が一カ所に集まるという恵まれた環境のなかでありながら、自分とは異なる分野の人がどんなことを学び、研究しているのかということについて興味・関心を持たないことはとてももったいないという気持ちがあったからです。僕らにとってなじみの薄い海事科学部についての講義がなかったのは残念ですが、12回の講義を通じ、学長を始め、各学部長の話の間で、それぞれの学部の成り立ちや戦後タコ足大学と呼ばれていた当時の学部間の隔たりやその後の一つの大学としての紆余曲折、また、神戸大学の姿・他学部の活動内容の概略が徐々にわかってきたように感じます」と。私どもの大学もタコ足大学でありまして、医学部医学科や医学部保健学科というのは、二回生から離れたところで生活を送るわけで、一回生のときだけみんなと一緒にしかないわけです。ですから、自分の学部や学科以外のことを知らないといっても、これは学生の責任ではなくて、そうならざるを得ないところがあるわけです。ですから、そういう学生ももちろんのこと、ほかの学部の学生もそうですけれども、こういう授業は一定の効果があると思います。

ここに挙がっている海事科学部というのは、平成15年10月からですが、神

戸商船大学と私どもとが統合し、新しくできた学部です。平成16年前期からは海事科学部長にも登壇していただいています。

概略は以上ですが、1つ補足します。部局長の先生方に話をさせていただくと、大きなパターンとして指摘できることは、文系の学部の先生は、とにかく伝統と歴史を強調する傾向がみられます。これは学生のレポートにもありましたけれども、私もずっと話を聞いていてそう思いました。それに対して、理系の先生方は、文系の先生方とは違っていて、いかに企業と連携しているか、あるいは地域と密着しているかを強調する傾向があります。医学部の先生もそうですけれども、それによってどれだけ収益を上げているか。神戸大学の経営に貢献しているかということを強調される傾向があります。文系でも経営学部の先生は別ですけれども、文系の先生方はあまり神戸大学への予算面での貢献ということはお話しになりません。無理からぬところがあるかと思えますけれども、そういう特徴が挙げられるように思います。

他大学の自校史教育もいろいろ調べさせていただいたのでありますが、これらを通じて何を感じるかといいますと、結局、大学に何がやりたいかわかって入ってきている学生が非常に少ないということです。これは私どもの調査でもそうです。それから、大学についてではなく、学部についてさえ、たま

たまここに入ったという学生が多いことです。私どもの大学でも、国際文化学部とか、発達科学部とか、名前を聞いただけでは何をやっているか、全然わからないような学部がたくさんあるわけです。そういう学生たちに、何をやりたいのか、はっきり目的意識を持つてというのも無理な話でしょう。大学で一体何をやっているのか、この学部はどういう先生がいて何をやっているのか、そういうことを教えることは、結局、自分探しの場としての大学、そして自分探しをする手掛かりを与えるということではないのかと私どもは考えているわけです。

もちろん課題は多くございます。もっと少人数ゼミをやってくれとか、少人数形式でやってくれという要望がその最たるものです。この授業は、300人以上の大人数講義で、一方通行です。ですから、もう少し学生との双方向的なゼミ形式でやってくれという要望がたくさんあります。以上です。

○寺崎 ありがとうございます。私よりずっとお若いわりには、あまり裏話もされず、しかしよく注意してうかがっているといろいろ推察できることもあったようにおもいます。

それでは、第3番目のご発表として、渡辺隆喜先生をご紹介いたします。渡辺先生は、現在、明治大学の大学史資料センターの所長でいらっしゃいます。同時に明治大学の理事を務められ、文

学部の教授でもいらっしゃいます。日本近代史のご専門なのですけれども、明治大学は近年、非常に立派な大学の展示室を本館のすぐそばに建てられました。同時に、百年史をおつくりになった直後で、大変活発なアーカイブス活動をなさっていらっしゃることであり、先生はその中心的な役割を果たしておられます。

### 事例報告3 - 明治大学

○渡辺 渡辺でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は自校史教育の事例ということでお話しするということにご依頼でした。この事例という言葉を少し拡大解釈いたしまして、授業自体というよりも、その周辺もかかわってお話ししたいと思います。まず、自校史教育が問題になった発端、そしてその教育の実態、その反省と今後に分けてご報告したいと思っています。

#### 1. 自校史教育の発端

明治大学は、今年で創立124年目になりました。今から14年前、大学創立百年史の編纂業務がすべて終わりました。通史編が2巻、資料編が2巻、図説、紀要20冊が完成しました。この編纂直後、明治大学には学長室の専門委員という制度があるのですけれども、私は特に後半の2年間、学長室の専門委員長という立場で、学長補佐の役割を担当しました。この時期は、ちょう

ど20世紀の世紀末だということ。そして、21世紀に向けての新しい明治大学像というものを構築しなければならないということが課題になっていた時期でありました。ちょうど世間では、ユニバーシティ・アイデンティティという考えが高まりつつあった時期でありまして、大学史編纂の体験をふまえて、これを21世紀の明治大学の教育に活かすことはできないかという検討が行われたわけです。そのときに、学長室の主催で、若手の教職員、卒業生のマスコミ人、企業人に集まってもらいまして、新しい大学像をめぐるフォーラムを数回にわたって開いたわけです。

このフォーラムで語られました課題は、次のようなものでした。今、明治大学に何があって何がないのか。まずこれを検討して、新しい方向性を探るべきではないかということだったので。出席者の大学時代には、キャンパスに方言が飛び交い、山笑い、山滴り、山装って、山眠るという四季があったのではないかということなのですね。キーワード的に言えば、コミュニティがあって、人間の集落、プラザがあったと。つまり、帰属意識を持った人間集団があったのではないかということが提起されたわけです。

ちょっとオーバーなのですが、現在は大学にこの人間陶冶の村はなくて、キャンパスライフの無機質化が進んでいるのではないかという指摘がありました。これは外部の委員からの発言であ

ります。これはちょっと厳しいと思われました。

この時期は偏差値の上昇に伴う都市型大学へ、明治大学の性格が変質する時期だったのです。一方で、不登校、あるいは精神的な弱者を生みまして、学生生活が少し空洞化してきている時期であったわけで、大学がかつてもったふるさととしての癒し能力が、発揮できなくなっているという考えが広まっておりました。むしろ明治大学は元気な大学だから、元気な明治大学を復活させる必要があるということが要請された時期でありました。

明治大学の現状は、ちょうど東京30キロ圏に学生の7割が集中する時期を迎えていました。学長室では、方言の間こえる大学づくりという言葉が合い言葉になったわけでありまして。この方言もいろいろありまして、7割が首都圏ということもありますから、地方の3割のふるさとと7割のふるさとの、二重のふるさと論が問題になってきたわけです。

偏差値で大学を選んだものの、学ぶ目標を見い出せずに悩む学生に、独自の伝統や校風を知ってもらって自信や誇りを持たせようということがそのときに課題になりました。同時に、大学自身の存在意義を見直すということが必要になったわけです。そういうことが語られてきたわけです。それには、自分探しを行い、自分のいる場所を明確にしてもらわなければいけない。そ

れと同時に、人間陶冶の村の再生を目指すことが確認されてきたわけです。

フォーラムの出席者が口々に述べていたのですが、大学の4年間というのは、物理的にはともかくとして、精神的には人生を決める大きな意味を持つときである。だから大学は、精神的にふるさとになるべきだということがあります。ここにゼミのOB会、あるいは同級会、あるいは校友会が存立する根拠が存在するのだと。大学とそれら組織は濃密な関係を持つべきであるということでもあります。これが大学ハイマート論、ふるさと論が成立するゆえんであります。

そのためにも大学史、特に自校史教育というのは、21世紀に大切な役割を果たすものとして、課題になり始めてまいりました。私は、学長室の仕事が終わりましたから、大学史の資料センター、前身は大学史資料委員会と申しましたけれども、百年史編纂の後身であります。この責任者となりまして、百年史編纂の成果を学生にも還元すると同時に、学長室のフォーラムの課題というものにも応えるような方向を実現していこうということで、学部間の共通総合講座に「日本近代史と明治大学」と題する講座を開設することを要請しました。ちょうど大学のなかに、私どもの仲間がそれぞれの要路にいたのものですから、これは直ちに実現していきまして、全国でも早いほうに自校史教育を始めることができたわけで

あります。

開講後、今年で満9年目が終わります。120、130人から150人ぐらいがほしい受講生の平均的な数字でありまして、学生は比較的良好に聞いてくれると思っています。

## 2. 自校史教育の実態

その実態はどうかと申しますと、「日本近代史と明治大学」というのは、その題名に示しますように、明治大学を日本近代史に位置づけて理解することを目的とします。明治大学の建学の理念というのは、「権利自由」、「独立自治」でありますから、この建学の理念のあり方をすべての授業で問題にしているわけであります。したがって、講義テーマは時系列で設定されています。みなさんのお手元に1枚の用紙が配布されていると思いますが、それが私どもの授業の時間表であります。担当者はすべて大学百年史の編纂にかかわった教員であります。それぞれが各時間を担当し、幕末期から戦後までをフォローすることになりました。講義は、最初に日本近代史における高等教育の歴史というものを、国立と私立の差として問題としますし、創立者の留学先との関連で形成される教育理念に言及します。そして、明治大学の位置を明らかにし、次の授業への橋渡しができるような準備段階の話を最初にしておきます。最後には、創立以来124年間で形成された明治大学の人的

遺産というものを、卒業生の質の問題として、これは難しいのですけれども、過去のいろいろなランキング調査などを利用して、話題とします。現在、外からどのように見られていて、また学内にいてもどう見るかということで、長所・短所をおおよそ明確にしまして、受講生の努力目標を話すわけです。この間には、創立事情から始まって、建学の理念、そして資本主義と人材養成、学生生活の変質というところに重点が置かれた構成になっています。

開講後3年目が終わり4年目に入った時点で、一応の総括を行いました。全受講生に感想文を提出させましたが、予想どおりと言うべきか、予想以上と言うべきか、反応は大変よかったように、私は思っています。たとえばどんな反応があったかという、いい面だけと言って大変申し訳ありませんけれども、いいことだけを申し上げますと、建学理念成立の背景と、そのもとで勉強する自分の場所ということが判明したということを行っている学生が何人かいます。それから、単なる単位取得のためにこれを取っただけけれども、取っていることでだんだん大学に親近感、自分の大学だ、自分の学んでいるところだということがわかってきたということを書いている学生が何人もいます。それから、明治らしさというところに特徴があるとすれば、自分自身が努力して自主的にそういう「らしさ」を出すように自分が努力しなければい

けないということがわかってきたと言っている学生もいます。それからもう一つ、非常にいいことだと思っているのですが、近代史を一般の歴史、受験の歴史としてしか知らなかったのだけれども、それが卒業生や大学のことを課題にすることによって、自分史の前提になるということです。こういうことを言っている学生がいるのですね。今4点を挙げましたけれども、なるほど、この講座を開いて意味があったのかなと考えさせられた感想文でした。

そのほかにも、明治大学の教育方針というのは、創立者が言っているのは、「自由討究主義」、それから「開発主義」です。担当の先生は熱心にこれを説いたらしくて、こういう明治大学の教育方針の自由討究ということが、自分のゼミとのかかわりで非常に説得的にわかってきたということを行っている学生も何人かいます。それからあとは、官僚制と学閥の問題を言っている学生もいますし、安保闘争の時代的背景とデモへの共感みたいなことを言っている学生もいますね。

それと同時に注文としては、明治大学の歩いてきた道はわかったけれども、今後とも、時代感覚に優れた大学であってほしいという注文をつけている学生もいます。

あと、明治大学の卒業生の活躍というものが、だんだん明確になってきて、自分もこれからどのようにいくなかというようなことが、わかりかけてきたと

述べている学生もいます。

いいことばかり言って申し訳ありませんでした。悪いことと言いますと、あまりこういうことは言ってくれないのですが、建学の理念や創立者の問題というのはだぶってくるものですから、ちょっとだぶりの講義が多いのではないかと、そこをなんとかしてもらえないかというようなことがありました。最近はなくなりましたが、最初にはありました。

あとは、理系の女子学生の話としては、理工学部は新しい学問の場所であるから、古いことは必要ないと。明日のことに頭を使えといつも言われていて、自分も古い歴史なんていうものは関係ないと思っていたのだけれども、やはり今日は歴史と関係あって、次の新しさはそれにかかわってくるということを、この授業を通じて考えて、理系教育だからといって明日だけでは関係ないのではないかと。それだけで考えてはいけないのではないかということ掲げている学生も出てきています。歴史的思考の問題であります。

そのほかいろいろ、講義をしている教員批判。批判というよりも、批評ですね。そういったものなどもいくつも掲げられています。おおむね良好なのですけれども、先生方に対するいろいろな感想も寄せられています。

さて、このような感想との関連で、その後の講義テーマの手直しも若干行っています。それは、校歌の成立、校歌

をもう少し詳しくやろうとか、二部教育、あるいは女子教育、あるいは体育会の活動に加えて、卒業生の動向、これも時間数を増しています。生田校舎では、農学部と理工学部がありますので、近代の理系教育の展開と明大理系卒業生の動向というものを加えて、キャンパスに即した独自性も出そうと試みてきました。最近では、有名な卒業生の生きざまを聞きたいという要望も出されていて、検討されています。講義は当初、私がコーディネーターとして取り仕切りましたけれども、現在では私は名目化しまして、大学史資料センターの運営委員が中心となって、採点法や進め方について話し合っています。

### 3. 自校史教育の反省と今後

最後に、反省と今後についてです。明治大学は創立124年の歴史のなかで、大学に昇格し、昭和期に入ったところから、当事者たちによって語られてきた合い言葉があります。一つは、「大明治建設論」。他の一つは、「学の明治」建設論です。「大明治建設論」というのは、学部増設論として、今日まで続いていますけれども、問題は「学の明治」の確立論です。明大アカデミズム論ともよくいわれるのですが、その内容が今までは明確ではありませんでした。明治大学の建学の理念とかかわった固有な学問的伝統があったか否か。これは自校史教育とも関連してくるわ

けです。私が責任者を務める大学史資料センターでは、4年前から明大固有の学風を「駿台学」と名付けて、その検討に乗り出しました。まず最初に、明治維新史の尾佐竹猛（おさたけたけき）という人を取り上げました。彼の著作集24冊をゆまに書房から刊行するほか、運営委員全員で尾佐竹研究を続けて2冊目の論文集が間もなく完成します。続いて、安藤正楽という県会議員、山崎今朝弥、平出修、布施辰治などの社会派弁護士。三木武夫関係文書6万5,000点の寄贈を受けて、三木研究につなぐことが計画されています。これは関係学部の教員の応援を得て研究して、これを各学部教育にも広げていこうと考えています。そして、最終的には大学史の資料センターの研究叢書として蓄積することを意図しています。

自校史の教育との関連で言えば、明大卒業生の有名人の人物論的な講義として、「人物に見る明大史」を語るための素材になると思っています。

来年度は開講10年目にあたり、これを契機に、学部一、二年生には時系列的な従来の「日本近代史と明治大学」を講義します。そして、駿河台の三、四年生用としては、明大人物各論を1年間、25人ほどで行いたいと考えています。今までの知識としての自校史から、精神史としての自校史へと昇華させて、明大人の気性とその爆発と言ったら格好いいのですけれども、その歴

史を語りたいと思っています。その場合には、駿台学と結びついた建学理念の現象史として語られることを期待しているわけです。

学生の感想と授業の反応から、このような方向性が現在、提案され、検討され始めたということを報告して、私の話は閉じたいと思います。私どもが目指すのは自分流の、最近言われ始めましたが、グローバル・ヴィレッジというようなことを少し目指そうとおもっています。以上であります。どうも失礼いたしました。

○寺崎 ありがとうございます。事例報告にとどまらず、前後の話もしてよろしいですかとおっしゃっていましたので、どうぞと申し上げました。それも時間内に収めていただき、まことにありがとうございます。

それでは、最後に老川先生にお願いいたします。老川先生は、立教の学内の方には申し上げるまでもありませんが、経済学部の教授でいらっしゃいます。一方、立教学院史資料センターの責任者、センター長でいらっしゃいます。よろしくお願いします。

#### 事例報告4－立教大学

○老川 ただいまご紹介いただきました、立教大学の老川です。経済学部に所属しております、近代日本経済史を専門としています。立教大学に立教学院史資料センターというのがありま

して、そのセンター長をしている関係で、今日はここでお話をさせていただくことになりました。

と申しますのは、立教大学に「立教大学の歴史」という自校史の講義があるのですが、私はその講義を担当していません。学院史資料センターには3人の学術調査員がおりまして輪番で講義をしております。自校史に関しては、もう一つ、「立教学院と戦争」という講義がありまして、この講義のコーディネーターはさせていただいているのですが、「立教大学の歴史」の講義はやっていません。そこで、学術調査員の方から資料を出していただきまして、ちょっと分厚くなりましたが、私が下手にまとめるよりは生の資料を出してお話をさせていただいたほうが、あとでいろいろみなさまの役に立つのではないかと思います。ちょっと厚いレジュメを作りました。

時間があまりありませんので、急ぎます。今日は立教大学の自校史教育がどのように成り立っているかという制度的なこと、講義内容、それに学生の反応の3点について報告し、最後に若干の、現在抱えている課題を率直にお話しさせていただきたいと思います。フロアには立教の関係者もたくさんいらっしゃいますので、少しお考えいただければありがたいと思います。

立教学院の自校史に関する講義は、1999年に小熊伸一さんという、現在岐阜のほうで大学の先生をされているの

ですが、寺崎先生のお弟子さんで、大学史といますか、教育史を専攻されていた方が、全学共通カリキュラム（全カリ）の「歴史学の多様性Ⅰ」で立教大学を考えるとのかたちで始めたのが、たぶん最初ではないかと思えます。その前に、寺崎先生が大学論のようなかたちの全カリの講義をやられておりましたので、そのなかで立教大学の歴史について話をされていたかもしれないのですが、「立教大学の歴史」というかたちで始めたのは1999年が最初ではないかと思われまます。そのあと、やはり寺崎先生のお弟子さんで、中野実さんという大学史の専門家がおりまして、この小熊さんと中野さんで交互に講義を担当していたのですが、中野さんが亡くなられ、小熊さんも遠方へ行ってしまったということで、学院史資料センターの学術調査員に講義を担当してくれという依頼がありました。そこで、学院史資料センターでは学術調査員が個人として自校史の講義を担当するというよりは、センターが業務の一つとして立教大学の自校史教育を担うということにして、学術調査員が「立教大学の歴史」を講義するようになりました。

それでは、学院史資料センターというのは、どういうものかということですが、その前に立教大学の概要について述べておきたいと思えます。立教大学は1874年に設立されて、今年（2005年）で131年目になります。学生数は



1万5,000人ぐらいで、池袋と埼玉県の新座市にキャンパスがあります。

立教学院125年史の編纂事業というのがありまして、先ほどの小熊さんも、中野さんも、私も、それから学術調査員の方たちも、寺崎先生ももちろんですが、125年史の編纂にかかわっておりました。

125年史編纂事業の特徴の1つは通史を出さなかったという点であります。これまで立教学院では85年史と100年史を編纂しているのですが、たぶん、いま通史と書いても100年史の水準を超える通史は書けないのではないかという判断があったからです。もっと資料を着実に、地道に集めて、立教大学史、あるいは立教学院史の研究を深めて、それから改めてもっときっちりした通史を書くべきではないかという意見が大勢を占めまして、125年史の編纂が終わったあと、立教学院史資料センターがつけられました。その職務はいろいろあるのですが、その1つに学院内における「立教史」の教育に関する事業とありまして、学術調査員が「立教史」の授業を担うということになっていったわけです。つまり、学院史資料センターは、学院史にかかわる資料を収集し、整備し、保存するというアーカイブ機能と、それから、これはまだできていないのですが、大学史に関する展示を行うということと、そういった活動をふまえて、それを学生に還元していくという意味で、全カリ

の「立教大学の歴史」の講義を担当する、そういう資料の調査、整理、保存と、それを前提とする研究と教育を業務にしている機関なのです。

先ほどの「立教学院と戦争」が、これは学院史資料センターの学術調査員と、学内の教員、それに学外からも研究者をお招きして、戦時下の立教学院に関する研究を進めています。実は文部科学省の科学研究費補助金を3年間もらうことができて、その成果も間もなく東信堂という出版社から単行本で出ることになりますが、その成果を講義という形で学生に還元しているわけです。学院史資料センターは、このように研究機能と教育機能を合わせもっている機関であります。詳しくは、ホームページなどで学院史資料センターの概要を紹介しておりますので、お読みいただければと思います。

続いて、今度は「立教大学の歴史」の講義の概要についてお話をしたいと思います。第1回目の講義で講義の目的と講義の内容についての説明がなされます。レジュメに掲載したのは2005年度、今年の講義で学生に配布したものです。自校史教育の背景には、各大学で年史が編纂されてきたという事情がありました。先ほど申し上げましたように立教大学では125年史が刊行されたあと、資料センターができました。それから各大学で、特に先ほどの九州大学等々、国立大学を中心に、大学文書館が整備されてきました。また、先

ほどからずっと議論になっていますが、スクール・アイデンティティを形成することの大切さが認識されるようになったということも背景にあるように思います。

自校史教育の目的ですが、大学とはどんなところか、所属している大学を理解し、そこで学ぶことの意味を考えるとなどにあると思います。講義のねらいは、日本の近現代史における立教大学の歩みとその特色を学ぶことです。大学の歴史を学ぶということと、大学の歴史を通じて日本の近現代史、あるいは現在自分が立っているところを学ぶという目的があるのではないかと考えられます。すなわち、立教大学を理解し、立教で学ぶ意義を再確認することが講義の目的であり、ねらいであると考えています。

次に、講義の内容ですが、今年度は豊田という学術調査員が担当しておりますが、お配りしたようなシラバスで行われています。講義の進め方は、講義形式でありまして、文書資料、125年史の編纂過程、あるいはその後の資料センターの活動のなかで集めた写真や文書資料を十分活用していこうということで、やっております。それから毎回、リアクションペーパーを出してもらっています。学生がどういった感想を持っているか、毎回把握するようにしています。

評価につきましては、出席の状況とレポートの内容によって総合的に評価

をしています。教科書は指定していませんが、『BRICKS AND IVY』という、立教学院125年史の図録と、125年史の資料編を一応参考書として指定して進めています。図録は125年史の編纂事業の中で通史に代わるものとして作成したのですが、叙述もしっかりしていて、かなりよくできたものと自負しております。

立教大学は、先ほど申しましたが、85年史と100年史、125年史がこれまでに編纂されてきました。また、学院史資料センターでは、『立教学院史研究』という紀要を出してしまっていて、毎回、玉稿を載せさせていただいていますが、3号まで出ていて、いま4号の発刊の準備をしているところです。それから、学内に『立教』という季刊雑誌があるのですが、そこに「立教史発掘」、「立教史散歩」というかたちで、学術調査員の方たちが交代で記事を書いています。

なお、レジュメに、豊田、大島、大江という、3人の学術調査員のシラバスを掲載しています。ほぼ同じ内容なのですが、それぞれの個性が多少出ていて、こうして並べてみると非常に面白いと思います。豊田は近現代日本史の専門家、大島は、近代日本教育史の専門家であります。また、大江はキリスト教史といえますか、立教の創設者のウィリアムズ主教の研究で学位をとっております。シラバスにはそれぞれの個性が多少表れているように思

えます。

少し講義の内容に立ち入った話をさせていただきます。実は、明治期に文部省訓令第12号というのが出されまして、宗教教育が制限されるという問題が起りましたが、立教学院はその問題にほかのミッションスクールと比べて著しく異なった対応をとったという、非常に有名な話があります。この問題について、今年度の講義の担当者である豊田が講義の中で実際に学生に配った資料をレジュメに掲げておきました。

どうしてこれを選んだかといいますと、学術調査員の大江が「立教大学の歴史」の講義を担当したときに学生が書いたレポートを見せていただきまして、私がちょっと面白いと思うところだけ抜き書きし、レジュメに掲載しました。ウィリアムズ主教や設立当初の立教学院について書いているものが比較的多かったのですが、訓令第12号に関する講義についての感想も多く、たぶん講義の内容がよかったからだろうと思うのですけれども、かなり分析的な記述になっています。もちろんここで取り上げたのは、わりあい内容のよいレポートですから、もちろんすべての学生がそのようなことを書いているわけではありません。

また、学術調査員の大島が講義をしたときに立教大学のホームページで取り上げてもらったことがありましたが、そのときの学生の講義に対する反応をレジュメに掲載しました。立教大学の

歴史がわかってよかったとか、わりあい好意的な評価が出されています。

また、これは同じく学術調査員の大江が自分で分析したのですが、授業評価アンケートによって学生の授業への取り組み方が、受け身的であることとか、単位を取るのが簡単でなければ取る価値がまったくないという学生の意見があるとか、今後改善すべき講義の問題点も残っております。

ただ、この授業評価を細かく見ていただければわかると思うのですが、全体としては好意的な評価が多く、学生はかなり関心を持って聞いていると思われまます。

それから、全学の学生がどれだけこの講義を受講したのかということですが、レジュメに2002年度から2005年度までの学年別、学部学科別の履修者数を挙げておきました。時間帯の関係かどうかよくわからないのですが、2003年度だけ686人という、非常に数多くの受講者があったのですが、それ以外は100名とか200名とか、そのぐらいの数です。また、1年生よりはむしろ2、3年生のほうが受講者が多いようです。

それから、これは問題点の一つなのですが、観光学部とコミュニティ福祉学部の受講生が非常に少ないのです。この2つの学部はキャンパスが埼玉県の新座市にありまして、この講義は池袋キャンパスで半期開講しているだけです。どうしても新座キャンパスにある学部の学生は履修できないとい

う問題があります。

また、2005年度の受講生のリアクションペーパーから一部抜き出したものや、立教大学になぜ入学したのか、なぜこの講義を受講しようと思ったのかというアンケートをしています。その結果も参考までに資料として付けてあります。

最後になりましたが、こうして学院史資料センターが「立教大学の歴史」の講義を担ってきたわけですが、現在いくつかの問題をかかえています。一つは、先ほど言いましたように、新座キャンパスの自校史教育をどうするか。今の学院史資料センターの陣容ですと、池袋キャンパスと新座キャンパスで2回開講するのは非常に難しい。「立教学院と戦争」という講義も開講していますので、なかなか難しい。それをどうするか。ただ、これはいつまでも放っておけない問題だと思いますので、今後、早急に検討していかなければならないと思っています。

それから、学術調査員が「立教大学の歴史」の講義を担っていますが、彼らは5年の任期制研究員ですので、間もなく任期が切れてしまいます。そのあとをどうするかという非常に切実な問題を抱えています。それから冒頭に申しましたように、資料の収集と研究、展示、教育という3つがセットになって、自校史教育というのは本当に充実したものになっていくと思うのですが、まだそれらの課題が十分に成し遂げら

れていません。展示が実現していないのです。ちょっと時間をオーバーしましたが、以上です。ありがとうございました。

○寺崎 ありがとうございました。本当にこれまで司会者としては至福の時、何の心配もなくうかがうことができました。

予定通り、ここで10分ほど休憩させていただきます。その間に、恐縮ですが、質問のある方はぜひお出しいただきたいと思います。それを整理して運営させていただきます。7時40分から開始いたしますが、もしその前にお帰りになる方がありましたら、申し訳ありませんが所属とお名前だけは書いて出しておいていただけないでしょうか。感想等、無理にお書きいただくことはありませんけれども、あとで統計を取ることが必要ですので、ぜひよろしくお願いいたします。

## VI 討論

○寺崎 再開いたします。指定討論者はまず、京都大学大学文書館の唯一の助教授でいらっしゃる西山伸先生のんしんにお願いいたします。次に、ノンフィクションライターの千葉望先生のんしんにもお願いいたしました。西山先生は、私の古くからの友人でありまして、かつ京都大学文書館のんしんは国立大学のなかでも一番先に整備されて、現在、広大な展示室をお持ちのアーカイブスです。それから千

葉先生は、確か先日、全カリ運営センターに取材に来てくださったんですね。それで、全カリの事務室から、「絶対にあの先生を呼んでほしい」という要望がありまして、私は今日初めてお目にかかりましたが、特にお願ひしておいでいただきました。西山先生からたびたび「私は何をしたらよろしいのですか」というご質問がありましたけれども、「アドリブでご発言下さい」と申してあります。ご自由にお願ひいたします。

お二人とも、だいたい7、8分ずつでお願ひしております。

西山先生からよろしくお願ひいたします。

○西山 今、ご紹介いただきました京都大学の西山です。よろしくお願ひいたします。

私は今、寺崎先生からご紹介いただいたように、大学文書館<sup>ぶんしょく</sup>というところに所属していますが、今日のテーマに即して申し上げますと、私もいわゆる自校史の教育を、つまり京都大学の歴史についての教育を学生向けにやっています、もう6年目か7年目か、それぐらいになります。今日の私の話は、私は教育学の専門家でも何でもないのですけれども、この6、7年の実践という、乏しい経験からのお話であるということをまず前提としてご理解いただきたいと思います。

申し上げたいことは、大きく分けて

2点あります。一点目ですけれども、実は私は今日の一つの大きな柱となっているかと思いますが、学生のアイデンティティとか、自分の居場所とかいう表現とはちょっと違う観点から、この授業について考えてみたいと思っています。いくつかの事例報告、それから九州大学の話もありましたけれども、その多くがこの授業は自校史、つまり歴史の授業というかたちで展開されています。それから、対象となる学生はだいたい、二年生ということになると思います。つまり、もう死語かもしれませんが、言ってみれば教養教育であると。この歴史の授業であるということと、教養教育であるということから、この問題を考えてみたいと思ったわけです。

先ほどどなたかから、教養教育を議論し始めると、それだけできりがなくなるというお話があったかと思いますが、非常に単純化して申し上げると、私自身は、学生にももの見方や考え方、そういうものを身につけてもらう場ではないかと思っているわけです。特にそれが歴史の授業ということであると、歴史的なものの考え方や見方を身につけてもらう。それもなるべく多面的に、ある一つの方向からではなくて、多面的な方向から身につけてもらうということが必要なのではないかと思います。

そういうところから考えると、何もテーマとしては、あえて自校史という

ものを取り上げる必要はないということにもなるわけですが、ただ、そこで一つ考えなければいけないのは、自分の学校というものが、当然のことながら、学生にとってみれば最も身近な対象であるということです。大学生にとってみれば、自分たちが一番長い時間を過ごす場所であるということです。折田さんのお話にも、自分の大学の歴史ぐらい知らないでどうするのかということがありましたが、まさにそういう身近な対象を取り上げることで、先ほど申し上げたようなものの見方や考え方を身につける重要なきっかけになるのではないかと思うわけです。

そういうことから考えますと、たとえば大学の歴史のなかでも、負の側面をどのように取り上げるかということ、非常に重要な問題になってくるだろう。負の側面といいましても、べつにわざわざ不祥事を選んで取り上げる必要はないわけで、たとえば戦争について、大学がどのようにかかわっていたのか。事例のなかでは、立教大学がかなりそこに突っ込んだかたちの授業はされているようですけれども、たとえばそういう側面を取り上げるということは、非常に大事だろうと思うわけです。

さらに、私が最近、大事だと思うのは、その時代時代、その時々大学の構成員、教員、特に学生たちですが、何を考えていたのかということ、受

講生たちに伝えるということ。その時々何を考えていたのかということ、それを伝えることによって、最初に申し上げたものの見方や考え方というもの、を身につけていく。そういうことにつながっていくのではないのかなと、私は思っているわけです。

そのために、豊富な素材、つまり資料ですね。しかも生の資料をたくさん提供する。大学の年史編纂の経験や、あるいは大学にアーカイブスが存在していることの自校史教育への意味というのは、まさにそこにあるのではないかと思います。できるだけたくさん生の資料を提供して、繰り返しになりますが、その時々学生や教員が何を考えていたのかを示すことが、非常に大事なのではないかと私は思うわけです。

さらにそう考えてみますと、今日のお話への一つの批判的な見解にもなりますが、必ずしも大学の歴史のすべてを総花的に紹介する必要はないのではないかと、私個人は思っているわけです。すべてのキャンパスの歴史やすべての学部の歴史というものを、私は必ずしも示す必要はないのではないかと思います。逆に、そういう方向のみを強調しますと、今日のお話のなかにもありましたが、ともすれば授業がルーティン化していったりとか、あるいはマンネリ化していったりして、いい表現ではありませんが、ほかのつまらないとされる歴史の授業とあまり変わらなくなってしまうのではないかという

ことを、私は危惧するわけです。

今のが一点目です。二点目は、受講生の側の変化をどうとらえるかという問題でして、冒頭で申しましたように、私はまだ6、7年しか授業をやっていませんが、そのなかでもやはり感じるものがいくつかあります。よくいわれるのは、学生の保守化ということで、それは確かに私もいろいろなところで実感していることがあります、それだけではありません。私は、毎回授業のたびに受講生全員から小さなメモ用紙に感想を書いてもらっています。特に最近思いますのは、一つには、学生は一方的な立場からの説明を非常に嫌う傾向があるということです。そのへんを見る目というのは、学生はけっこう持っているのではないのかなと私は思っています。そういった学生のあり方をどう考えるのかというのが一つ。それからもう一つは、ある事件でも何でもいいのですが、それについての論理的な説明というよりは、ちょっと表現をどうしようかと考えていますが、心情的な部分、あるいは情念的な部分からの説明に共感を持つ学生が比較的多いということです。

具体的な例を1つ紹介させていただきます。京大では滝川事件という有名な事件がありまして、大学の自治をめぐる法学部の教授会と文部省が戦ったといわれる事件です。学生は、さすがに事件があったということはだいたいわかっています。自治をめぐる戦いで

あり、国家権力との戦いであると。滝川幸辰教授を中心とした、あえて言えば英雄的な戦いであるということぐらいの知識は、半分ぐらいの学生は持っているわけですが、実際にいろいろ資料をあたってみると、そういう側面もありながら、もう一方ではたとえば、滝川という人の人格的な問題ですとか、あまり言うてはいけないのかな、彼は学内での人望は非常に薄い人でしたので、それが事件に影を落としているという問題であるとか、法学部の教員の年代的な、あえて言えば派閥的なグループの問題であるとか、そういうことが実は事件の底流にもあるという話をしますと、学生は非常に興味を持ち、共感を覚える。つまり、ある種建前的な、自治のために戦ったという側面だけではなくて、人の心のなかの動きといったものが、事件に大きな影響を及ぼしているということに、非常に共感を持つ学生が、近年多くなってきたように私は思うわけです。

そういったような学生の変化を見ると、これはかなり私の個人的な感想ですけれども、最近の学生は成熟しているとも思うのです。そういうことって、私は最近ようやく世間的に中年といわれる年齢になってきましたが、それぐらいになってやっとわかってくるもので、たぶん私が学生時代にそのような説明を聞いたなら、そんなことがあるものかと反発したと思うのですが、最近の学生は成熟しているのか、ある

いは私が幼かったのか、どちらかわかりませんが、今申しましたような傾向がかなりあるなと思っています。

そういった学生の気質のある種の変化というもの、こういう授業のなかでどうとらえていくのかということも、一つ議論してみる必要があるのではないかなど。これが二つ目の論点です。ちょっと長くなりましたが、以上です。○寺崎 ありがとうございます。大事な論点を出していただきました。

では、千葉先生、よろしくお願いたします。

○千葉 私は、先ほどご紹介にありましたけれども、全カリの取材に来たのがご縁の始まりです。私は今、リクルートが出している『カレッジマネジメント』という大学関係者向けの雑誌に「新就職考」と題する連載をしています。毎回いろいろなテーマで書いているのですが、最初編集長が依頼をしてきましたとき、「大学はいろいろな改革をしているが、企業人から見るとその改革がずれているのではないかという気がしてならない」と言うのです。私は企業人事部の取材や経営者の取材を長くやってきましたので、経営者や企業の取材をしつつ、大学改革の方向性が本当に大丈夫なのかということを書いてくれないかということでスタートしました。

企業の経営者と話をしてわかったことは、彼らが求めているものは、スキ

ルではないということです。一番求められているのは、少なくとも長期的に人材を育てようと思っている会社であれば、“考える力の深さ”だという気がします。最近の学生さんは大変適応力があって、問題に対する回答は早いのですが、むしろ求められているのは問題を発見する力、それからたんに問題の中身を回答するのではなくて、解決する実行力を求めているように思います。ただ、学生の親御さんなどは、就職率を上げてほしいという理由で「資格取得を支援してほしい」「就職指導を強化してほしい」と目に見える成果を求めますし、学生にもそういうところがあります。そのため大学らしい学問をする時間が減っていき、大学は単なる通過点になりかねないという状況があるような気がするのです。

その一方で、私が学生と話したり、あるいはアンケートを見る機会があると、本当に気の毒なことに、いつもいろいろなことに追われているのですね。さまざまな要望を大学に出してはみるものの、どうしても表層のところが多かったりしまして、その要望に大学ができるだけ誠実に対処しようとすればするほど、企業経営者の要求とはずれが生まれてしまう。たとえば就職指導においても、一所懸命ガイダンスをなさったり、模擬面接をなさったりしています。それがたんなる反射神経の育成になってしまうのではないかという疑問が、私には常日ごろあります。教



科書を暗記するようなものですね。先ほど教科書をつくると、暗記するという方向になりがちだというお話がありましたけれども、これは大変よくわかります。

私は、誰もが学生のことを思っているのが、かえってたちが悪いかなという気がしています。親御さんはもちろんそうですし、高校の先生、大学の先生。それから、企業の人事の人などもけっこう学生のことを考えていたりするんですね。それと、リクルートなど関連サービス業の人たちというのも、本当に大学生にいい選択をしてほしいという気持ちはベースとして持っているのです。私もかかわってきて、そういう気持ちでやっているのですけれども、その結果としてどうなるかという、さらに与えて詰め込んでしまう。わかりやすい成果を学生に実感させようとしてしまう。それがますますよくない方向になっているかなというのを、長く取材してきて最近とみに思うのです。結局、みんな待てなくなっているのでしょうか。成果を求めて、最短距離を行こうとしている。それが学生である若者たちにとって、どれほど本質的に苦しいことなのか、私たちは忘れがちだと思います。

早くから就職活動をしなさい、自己分析をしなさいと言います。それから、内定すれば企業はいろいろな資料を送ってきて、入社前教育というのをやろうとして、通信教育までさせますね。で

も、私はそんなことやめなさいと言うのです。やめてくれませんかけれども(笑)。結局、詰め込んで詰め込んで、キャリアアップだ、スキルアップだ、資格取得だと入社してから追われてしまう。ただ、それが本質的にどの程度求められているかということになりますと、少なくとも経営トップの人たちというのは求めていないのです。MBAや簿記は、あれば便利だし、それが必要な職種もありますけれども、それよりも本当に必要なのは、厳しい判断の場、リーダーシップを発揮しなければいけない場合にこそ必要な“人間力”である。それをつくるのは、深く考える力であり、深い教養であるということはどなたもおっしゃいます。ただ、これは残念ながら、目の前のことに対処しては決して育たない能力でもあるという気がいたします。だから、すぐに役立つことばかりやっていると、ひょっとすると人生の役には立たないのかなというのが、私の実感です。

取材にこちらにうかがったのも、リベラル・アーツが軽視されている動きがあると耳にしまして、では、それは実感としてどうなのかということをかかがいに来たのです。私の時代の教養はどうだったかということ、私の母校・早稲田大学では極めて貧弱な教養科目しか用意されていませんでした。今は違うかもしれませんが、少なくとも当時は大教室での授業で、先生がノート

を読むだけというのがほとんどでした。

ただ、これまでの先生方の発表をうかがってしまして、自校教育というのは大学によっていろいろなやり方があるというのはよくわかりましたけれども、これは一つの新しい基礎教養のあり方なのだろうなというのが実感です。自校教育というのは、何しろ明日のご飯の役にはまったく立たない教育だというのがいいところですね。その代わりに、自分が何によって立つのかを知る意義がある。なぜ自分はここにいるのか、そもそもなぜ母校が存在しているのか。それから、建学の精神がどれだけ尊かったか、あるいは今の現実とどれだけギャップがあるのかということも含めてなのですけれども、少なくともそれを考えさせるきっかけにはなるであろうという気がします。それを知ることで、より大きな道に進めるかもしれない。みんなが進むなどということは、私は到底申せませんし、期待もしておりませんが、そのきっかけの一つには十分なりうるであろうという気がしました。

実は、私は今、学生でもありまして、京都の仏教大学の大学院に行っています。仏教大学の通信教育部で、大学院ということもあり、社会人が多く在籍しています。私は今年の4月に一回生になったのですけれども、同期生が8名、実は私は若いほうから2番目でして、あとはみんな年上なのですね。みなさんほとんどが社会人で、大きな病

院の院長先生などもいらしています。その方々は、当然ですが自腹ですの、コストパフォーマンスに極めて厳しい。私も当然厳しいです。先生にどんどん議論を吹っ掛けて、それが珍説であることも多いのですけれども、黙っていないでどんどんやるわけですね。夏、スクーリングに2週間行ったとき、あるゼミに参加しましたが、そこは通信生だけではなくて通学の院生の若い人たちも一緒に参加するというかたちをとっておりました。彼らはあまりにも通信生が攻撃的かつ熱意を持って授業に参加するので、びっくりしているわけですね。彼らはやはり院生になるぐらいですから学問は大好きです。しかし、仏教大学という大学を積極的に選んだかということ、そんなことはない。それほど入学時の偏差値が高い大学ではないので、どこか落ちてしまったとか、あるいはお寺の息子さんだからしようになく来たという子が多いわけです。ところが、私ども社会人は積極的に選択している。それはなぜかということ、仏教を勉強したいから。それから、通信教育でないと通えないという理由もありますが、極めて明確な理由があって選択して来ている。もちろん講義態度も積極的です。何しろ自分で考え抜いて選んだ大学院です。若い彼らは私どもと一緒に講義を受けることによって、自分たちが通っている大学をあらためて見直すのですね。お酒の場で話してみると、そんなふうに価値を持つ

て見られている大学なんだということに気がついて、自分ももっと頑張らなくてはいけないという反応を示しています。結局、私どもは自校教育もやってしまっている格好になるのです(笑)。一方で私たちも彼らの反応を見て、何かひとつのきっかけさえあれば、きちんと目覚め、集中して勉強していくという若々しさ、態度の変化の速さ、伸びしろみたいなものに、大きな刺激を受けているわけです。

若者に限らず、自分の立つところを知る意義というのは実に大きいのだなと思います。今日のみなさんのお話をうかがっていても思ったのですけれども、沖縄学者の伊波普猷(いはふゆう)の言った、「汝(なんじ)の立つところを深く掘れ、其処(そこ)に泉あり」という言葉を、私はあらためて実感しました。以上です。

○寺崎 ありがとうございます。お二人のコメントにそれぞれまたお答えになりたいかもしれませんが、自動車のお時間のおありの方もいらっしゃいますので、できれば20時10分ぐらいにはお開きにしたいと思っています。そういうわけで、大変恐縮ですが、もしよければお話のなかにお二人のコメントについてのお答えを入れていただきたいと思います。

数通、質問をいただいていますけれども、全部はとてもしゃせん。それで、せっかくお出しくださったのにま

ことに恐縮ですが、はしょらせていただいて、要点だけ私の口から申し上げたいと思います。

まず、折田先生のほうにはかなり重い質問が3つ来ていますので、これは一番最後にさせていただきます。あと、ほかの先生方をお願いします。

麗澤大学の桜井さん、法政大学の新田さんから出ている共通した質問ですが、評価の問題です。自校教育をやったときの評価について、たとえば新田さんは何と書いてあるかということ、評価については暗記型の試験のほかにもどのような評価の方法があるのでしょうかということですね。せっかく大学とは何かというテーマを掲げた科目なので、それにふさわしい評価をするのが本道だとは思いますが、ぜひご教示いただきたいということです。

同じように、麗澤大学の桜井さんからは、成績評価の難しさを教えてください。理念や特徴を打ち出す授業は、ある意味で学園ナショナリズムにもなりやすいと思うのですが、その場合、何をもちょうプラスの評価とするのか、難しいと思いますが、いかがでしょうか。恐縮ですが、小関先生からずっと、全員でひと言ずつお答えください。一番お答えにくいのが立教大学の先生だと思いますけれども、よろしく願います。

○小関 評価は非常に難しいですね。ですから、あまり書いてある内容によって価値的な評価を下すことはできませ

ん。大学に関して肯定的なことを述べるか、否定的なことを述べるかということによって評価することは当然できませんので、やはり講義担当者が述べた授業の内容をどれだけ正確に理解して、それがどれだけの確に叙述できているかということですか、評価はできないです。若干、出席点などもありますけれども。ですから、年によるのですが、立命館の場合、資料は持ち込み可としている年もあります。昨年度はそれはやめまして、資料持ち込み不可ということにして、初めて受講生に自分の記憶だけを頼りに書いてもらうようにしましたけれども、今申したようなかたちで、価値的な評価は非常にしにくいので、立命館の場合には、やはり通常の試験のように、担当者の伝達したことをどれだけ正確に再現できたかということに終始しがちなという気がいたします。

○山内 私どものところは、「神戸大学史」と「神戸大学の歴史、現状、将来」という2つの授業がありますが、いずれも試験はしていません。すべてレポートのみの評価です。それに出席点がある場合、ない場合があります。

レポートの評価ですが、何字以上何字以下という制限がありまして、その規定を満たさないものは当然不可ですが、あまり我々のやった授業に対する価値判断を、学生のレポートに対する教員の価値判断をしにくい。何を基準に評価するかというと、今、小関先生

がおっしゃったことに尽きるわけでした、講義内容をどれぐらい正確に理解したか、あるいはどれぐらい深く考えたかに尽きるわけです。以上です。

○渡辺 明治大学の場合は、レポートです。それぞれその先生に3回レポートを出してもらっています。その先生が話をしたことをどれだけ理解しているかということが中心だと思います。最終的には私のところに点数が上がってくるのですけれども、私のところでは、あとは出席点を加味するぐらいで、最終評価を出しているということです。ただ、レポートの回数が3回というのは多すぎるのではないかという話が学生からもあるのですが、運営委員のほうでは、3回ぐらい書かせるのは当たり前だということで、ちょっと厳しいかもしれません。現在は従来通り、最終的に私のところでは平均点を出して出席点を加味するというで出すようなかたちになっています。3分の1ぐらいは落ちる可能性があります。

○寺崎 老川先生、大丈夫ですか。

○老川 一応答えますので、もし間違っていたらフロアにおられる学術研究員の方から訂正していただきたいと思います。

先ほど申しましたように、レポートと出席状況で評価するということになっています。毎回リアクションペーパーを書いてもらっていますので、それと出席の状況とレポートで評価します。「立教学院と戦争」のほうもそうなの

ですが、受講生がテーマを決めて、それについて講義の内容を思い起こしながらレポートを書きます。評価のポイントは、講義内容にプラスしてどこまで自分が新しく調べたことがあるか、ある程度分析的になっているかどうかということです。

それから、よくあることですが、レポートで一番困るのは、ホームページの記述か何かを適当につないで書いたものですが、それも学術調査員は自分たちがいろいろなものをよく読んでいますから、学生がどこの何をつないできたかというのが、読むとわかるのですね。今のところはそういうかたちで評価しております。それでよろしいでしょうか。

○寺崎 どうもありがとうございます。ほかに、今言い足りなかったことのある先生はおられませんね。

それでは次に、実は折田先生のほうに質問がたくさんきています。順番に申し上げます。まったく即興でお答えください。

一つは、「折田先生のお話からは、教員の関心も高まり、ひいてはFDにもつながっていくとうかがって、大変興味深く思いました。この点、教員の間にどのような影響があったのかを、もうちょっと詳しく教えていただきたい」、青山学院大学の杉谷さんからのご質問です。

○折田 最初に歴史についての私の考えを申し上げます、私はもともと国史学、

今は日本史学といいますが、その出身でして、まずは事実を知ることが重要だと思っております。ですから、九大に関してもたくさんを知っているほうがいい。そこで今のご質問についてであります。九大の教職員は九大の歴史や九大のことをほとんど知りません。しかし、たとえば、私どもの教科書『大学とはなにか—九州大学に学ぶ人々に—』について言いますと、本を書くのですから、いい加減なことを書くわけにはいかない。九大関係者の知らないことを自分の責任で書くということになれば、教員自体が大学の歴史や大学論など、自分の大学に対する認識を高めなければなりません。自校史教育と言っても、本当は学生より、特に国立の場合は教員のこのような認識のほうが、まずは必要なのではないかと思います。

○寺崎 2番目は、「アーカイブスの具体的機能と実際の授業との関連をもうちょっとご説明願いたい」、ご所属は書いてありませんが、鈴木勇一郎さんからのご質問です。

○折田 一つは、歴史の叙述はなによりも正確でなければなりません。その場合、原文書にあたるという基本的な作業を要しますが、大学アーカイブにある事務文書（簿冊等）を利用することは、その手続きを踏んでいるということです。私の学生時代、実際の史料に基づいたわけでもないのに、ただ「日本の大学は駄目だ」と言う先

生（西洋史）がいましたが、このような印象批判ではない、学問的にきちんとした裏付けを持っている大学史（自校史）の授業ができるということ、この点が一つ。それから二つ目は、アーカイブの資料自体を実際の授業に活用できるという点です。九大の大学文書館では、事務文書だけではなく多くの写真資料を所蔵していますが、報告でも言いましたように、写真や映像をDVDなどにして上映すれば、これらは立派な視聴覚教材ということになると思います。

○寺崎 もう一つ、立教大学文学部の上田信さんのご質問で、2つあります。一つは比較的实际的なことなのですが、「自校史研究やその教育に卒業生をどのように巻き込んでおられますか」と。「たとえば、卒業生からの回想録、情報提供、寄付による自校史の充実というものはいかがでしょうか」。

○折田 最初のご質問ですが、我々の授業とは別に、総合科目「社会と学問」というものが開講されております。九大出身の著明な人たちをお呼びして話をしてもらい、その講義を聴くというものです。こういったもので単位をやっているのかという批判も出たそうですが、そのような授業が既になされております。ですから、私たちの授業で卒業生に特別に講義を御願ひしたりということはありません。ただ、職員の方に一度話をしてもらい、名誉教授の先生にも御願ひしたことはありました。

それから、卒業生からの資料の寄付や情報提供等についてですが、これは大学文書館が力を入れて収集・保存に努めているものです。学生時代の講義ノートや回想録（私家版）、卒業証書など、貴重な資料が集まってきています。

○寺崎 私も国立大学に勤めていたけれども、一般に国立大学の場合、卒業生の母校への関心というのは、極めて低いものでありまして、卒業すればもうそれでいいというのがだいたい通例なのですね。ですから、「巻き込む」ということ自体が非常に難しいだろうと思います。

上田さんからの2つ目の質問です。これはちょっと重いですが、お書きになっている通りに読んでみます。

「戦前の九州帝大というと、日本の南洋進出の学術面での拠点と位置づけられていたと思います。植民地における九大の活動、台湾出身の学生の足跡など、自校史のなかでどのように扱われていますか。九大医学部に残されたアーカイブスの研究成果などは、日本の帝国医療研究の宝庫であるとも聞きますが」。ただし、付け加えていらっしゃいます。「回覧された資料の九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究は、とても優れた成果だと思いましたが。このような成果は、授業にも反映されているのでしょうか。」

よろしくお願ひします。

○折田 留学生のことから申しますと、

ご指摘の通り、『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』という「科研」の報告書を出しました。これにつきましては、一つの大学のものとしては貴重なものであるとのお褒めの言葉もいただきましたが、それはやはりアーカイブがあったおかげだと思います。九州帝大時代のほぼ全員の留学生の「名簿」を報告書に入れることができました。そのとき、朝鮮・韓国出身者については、本名の判らないものはいわゆる創氏名を出すことにしました。これは大学（副学長）としての判断でして、創氏名のまま「名簿」に出ている方が何人かおられます。ただ、留学生の卒業後の足跡については、韓国の場合は九大の韓国研究センターの資料もあって判る人も多いのですが、中国、台湾等についてはあまりよく判っておりません。そういった意味からも、研究はまだ始まったばかりで、今はさらなる調査をしながら授業に還元していく段階だと思っています。

南洋進出や帝国医療との関わりにつきましては、これは博物館の資料ですが、九大には人類学、考古学関係の骨標本が膨大に残されており、専門の先生もおられます。私たちの講義にも加わっていただければ、新たな授業の展開もできるのではないかと思います。

ところで、九大の戦中の事件としまして、皆さんもご存じのことと思いますが、いわゆる生体解剖事件があります。従来、微妙な問題であまりふれら

れなかったのですが、最近、直接関係した講座の『百年史』が出され、そこでかなり詳しい記述がなされています。私は講義では必ずふれるようにしていましたが、今後もしっかりと伝えていかなければならない事実だろうと思います。

○寺崎 それでは、そろそろ時間でございます。今日はいろいろな大学からおみえいただいたわりにはとというか、であるからこそ逆に、自校教育について非常に実のあるお話をうかがうことができました。私などは特に、歴史教育としての自校史教育という側面にも非常に関心を持っています。そのなかでいろいろな点でヒントを得たと思います。もっとご発言なさりたい方もいらっしゃると思いますけれども、時間の関係がありますので、これでいったん終わらせていただきたいと思います。

最後に名和先生、ご挨拶をよろしくお願ひします。

○名和 全カリ総合部会長の名和です。今日は、特色ある大学教育支援プログラムの採択記念の第1回目のシンポジウムということで、自校教育の意義について討論することができました。これだけのメンバーはなかなかそろえられません。また、フロアの方にも専門家に集まっています。全カリでもシンポジウムは過去もう何度もやっているのですけれども、これだけ熱い報告と議論ができたことは、大変喜ばしいと思っています。そういう面

から言いまして、特色GPに今年採用していただいて、非常によかったなと思っています。それが第一点です。先生方、どうもありがとうございました。

それで、特色GPに採用されまして、この間、シンポジウムが全国7カ所で行われました。その感想についてだけ、ここでひと言申し述べさせていただきます。

結局、特色GPとは何かということで、シンポジウムに3回出まして、ずっと考えていました。私の思うところ、要するに、今の大学に求められているのは、大学教育の質ですね。授業の品質保証をきちんとしろと。している大学には、特色GPで認定するよということではないかと思います。授業の品質保証なのですけれども、結局は、採択されたところを見ますと、理系や実習系の大学のカリキュラムが圧倒的多く採択されています。むしろ今日議論になりました、人文系や教養系の教育が特色GPに採択されている割合は非常に低いのです。これについて、京都の会場で私も質問したのですが、なかなかはっきりした回答は得られませんでした。

ともかく、そういう状況から見ましても、教養教育には、今日の自校史教育を含めて、日本の全体の流れのなかでは、むしろ逆風が吹いているのではないかと思っています。

しかしながら、先進的に取り組んでいる大学のご報告をいただきましたし、やはりこれを教養教育のなかに位置づ

けて、我々も大学生に大学で学ぶ意義等を教えていきたいと思っています。

最後に、今回は最初のシンポジウムでして、特色GPの予算は4年間使えます。ということで、立教科目はこのほかに、もちろん「大学」「都市」「宗教」「人権」、それから来年から新しく我々の大学では、「平和」「ウェルネス」「環境」「いのち」というようにテーマを広げて教養教育を展開していきます。ですから、このシンポジウムも今日は1回目にして、2回目、3回目、4回目を予定しています。大学のなか、あるいは学外の方もこういうテーマでやってほしいということがありましたら、我々のほうにぜひご提案ください。2回目以降もこういうかたちでシンポジウムを開催していきたいと思っています。

今日は遅くまで、報告者の方、あるいは討論者の方、それから参加された皆様に御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

○寺崎 それでは、どうもありがとうございました。これでシンポジウムを終わります。

(終了)